

熊本が 生んだ

史甲の 聖人

志賀

哲太郎



会誌2号

【目次】

会長挨拶	---	1
推奨のことば	---	2
志賀哲太郎と台湾	---	3
聖人と崇められる見習い教員	---	5
「志賀哲太郎小傳」抜粋	---	8
資料で辿る志賀哲太郎の足跡	---	14
今に生きる志賀哲太郎	---	24
資料(人物像・年表)	---	30

志賀哲太郎顕彰会

平成29年8月

【表紙写真】台中市大甲区の「文昌祠」

文昌祠は、中国の東晋代に蜀王を名乗った張育（篤学の士・張亜子）や北斗七星第4星の文昌星（柄杓になぞらえた杓部に当たる4つの魁星のうちの一つ・文運を司る星）が合わさった神格である。他に道教の朱衣神、南宋の学者・呂祖、後漢末の武将・関羽を合わせて五文昌と呼び、ともに祀ることが多い。張育は後に文昌帝君と呼ばれるようになったとも言われる。

祠廟は文昌廟、文昌宮、文廟、書院とも呼ばれ、張育の出身地である四川省を始めとして中国各地に存在し、台湾にも数多く造られている。厳しい科挙制度が確立されていく中でこの神への信仰が深まったものとされ、現代でも受験生に信奉されており、日本の天満宮（菅原道真公を祀るお宮・天神様）に対する信仰のあり方に似ている。

写真の大甲区の文昌祠には拳法修練のための一角があり、ここが文武両道の修行の場であったことが窺われる。

■ 会長挨拶

会長 宮本睦士 (益城の歴史遺産を守る会会長・元小中学校校長)



本年1月に、故松野國策会長の後を受けて本会の会長職を引き継いでから半年余りが経ちました。

熊本大震災で大きな痛手を負ったふるさと益城町の復興は、未だ先が見えない状況にあります。

そのような中で、せめて、文化的側面において、町民の皆様の励みとなり、心の支えになるのかもしれないという、ささやかな思いを抱いて、会員の皆さんと一丸となって、志賀哲太郎先生の顕彰を続けてきました。

とりわけ、繊細な心を持った子どもたちの心に内在するであろう災害の衝撃の跡は、推し量るのも難しいのですが、故郷益城町にこのような立派な人がいたのだという事実が、どれほど子どもたちの心を前向きにさせるものであるかは論を俟ちません。

私も永く教職の道を歩いてきた者として、このようなときに、まず心にかかるのは、子どもたちの心のありようの問題であり、そこに思いが至るのは、永年の習い性と言っていいものかもしれません。

志賀哲太郎先生は、30余歳にして教職の道に志し、新天地台湾へ渡られました。その頃の台湾は、教育の概念など些かもなく、今の時代から考えれば、想像もつかない社会環境だったようです。

子どもたちは、もの心がつけば家業の手伝いをするのが当たり前で、親も代々、そのようにして育ち、子どもたちを同様に育てていくのが当たりの社会だった訳です。

そんな教育不毛の土地で、しかも知る者として少なく言葉も不自由ななかで、異国の民の親を説き伏せ、教育の重要性を説いて学校に出させていくことがどれほど困難なことであったか、想像もできないほどです。

先生は、手弁当で一軒々々学齢期の子どもたちの家を訪ねて回り、地道な教育勧誘活動を続けられたようですが、当初、数名からスタートした学校は、年々、生徒数を増していきます。

10キロも20キロも歩いて遠くまで出かけては親の説得に努め、一旦、学校に出てきたとしても、また来なくなる生徒を迎えに行き、病気の子どもがあれば欠かさず見舞い、学資のない子にはこれを立替え、貧しい子には文房具を買い与える。

先生をそこまでさせた動機が一体何だったのか、凡俗にはなかなか掴み得ないところですが、それらの数々のエピソードには、ただただ胸を打たれるばかりです。

先生のこのような、まさに献身的で地道な努力は、やがて、大甲の街の人々を知らずしらずのうちに衝き動かし、子どもたちの心を捉え、慈父のごとく慕われることとなり、親たちもまた、絶対的な信頼を置くようになります。そんな変化のなかで、大甲はいつしか台湾で最も優れた教育環境を形成して行き、就学率も進学率も郡を抜く成果を示し、後に台湾の各界に多くの人材を輩出することとなります。

それでも先生は、何らそのことを銜うことなく、黙々と雇教員の身分に甘んじてひたすら子どもたちを愛し、26年間、情熱を持って教壇に立ち続けたと伝えられています。

そんな志賀先生の精神を知れば知るほど、その高邁さに襟を正される思いがするのですが、私を感じるこの思いが、益城の子どもたちに伝わらない筈はありません。

先生の御事績は、文化的側面のみならず教育的側面においてこそ、この益城に大きな影響を与えるであろうことを信じて疑いません。

その波紋は、やがて県内に、そして全国に広がっていくであろうことにもまた疑いはありません。

本会では、先生の顕彰活動を通じて、熊本県や益城町の関係当局、関係機関の御指導を仰ぎながら、様々な方面において、県や町の発展に貢献できるような提案をして参りたいと思います。

今後とも、益城町内外の多くの皆様の御支援をお願い申し上げます。

■ 推奨のことば

国会顧問 木原 稔（財務副大臣・衆議院議員）



熊本地震から1年余りが経ちましたが、被災された皆様に、あらためて哀悼の意を表しますとともに、心からお見舞いを申し上げます。

また、ふるさと熊本の復興に向けて日々御尽力頂いている皆様に対し、深甚なる敬意を表し、感謝を申し上げます。

私は、自民党青年局長の職にありましたとき、当職が台湾との国交の窓口でありましたことから、度々、台湾に赴く機会があり、その折々に、当地において台湾の発展に尽くされた我が国の多くの先人先輩達の偉業の跡を目の当たりにし、また、台湾の人々からそのエピソードを縷々聞かされておりました。

台湾の民生安定に多大な功績を遺した後藤新平は言うに及ばず、主要都市の上下水道を完成させた浜野弥四郎、浜野の指揮のもとで華南平野の大規模灌漑を成し遂げた八田與一、それと連動する形で日月潭に水力発電所を建設した山形要介や国弘長重、港湾工事に尽力した川上浩二郎、台湾縦貫鉄道を敷設した長谷川謹介、近代都市建設に貢献した森山松之助や堀見末子（まっす）、等々、数え上げればきりがありません。それらはすべて日本政府による多額の投資を必要としたばかりでなく、事業担当者の命にかかわるような大事業ばかりでした。

先人の偉業は、目に見えるものばかりではありません。明治政府が台湾領有と同時に取り組んだのは衛生と教育です。特に、教育の普及には並々ならぬ努力が払われました。

当時台湾総督府民生局学務部長であった伊沢修二は、全国から選りすぐりの6人の教師を台湾に呼び寄せ、台北の芝山巖に学校を設置します。しかし、これら6人の教師はわずか半年の後、暴徒により惨殺されてしまいます。彼らは、避難を勧める台湾の周辺住民に対し、「死して余栄あり、実に死に甲斐あり」と語って命がけで教育に取り組んでいることを示し、「身に寸鉄を帯びては教育は成り立たぬ」として丸腰で暴徒の説得に当たり、終に全員が命を落とすこととなります。

この6人の教師（六氏先生）が示した教育に賭ける犠牲的精神は「芝山巖精神」と呼ばれ、事後、台湾教育の進展に多大な影響を及ぼすこととなり、現在でも芝山巖は教育の聖地とされており、六氏先生のうち最も若い先生は、平井数馬といって熊本の出身です。当時17歳。私の母校済々黌の大先輩で、文武両道に秀でた伝説的な俊才でした。

この事件の後、六氏先生に続けと多くの教師が台湾に渡ります。特に熊本から渡台された教師は台湾の小学校、公学校（台湾人子弟の小学校）の教師の1割を占めるに至ったと言われています。

益城町出身の志賀哲太郎先生もそのようにして渡台されたお一人かどうかは分かりませんが、先生が並々ならぬ思いを持っておられたことは確かです。

台中市大甲区では、今も「大甲の聖人」として先生の偉業を語り継ぎ、その遺徳を敬い続けており、そのことを知らされた私は、あらゆる機会を捉えて、私なりに先生の啓発に取り組んで参りました。

平成27年に、益城町に先生の顕彰会が発足するとお聞きし、私も歓喜の思いで、当初から応援をさせて頂くこととなりましたことは、何かの御縁であり、有難いことと思っております。

志賀先生の御事績は、まだまだ明らかにされておりませんが、いつかきっと、とてつもなく偉大な全貌が明らかになるであろうと思っております。

顕彰会の皆様の御尽力に敬意を表するとともに、益城町民の皆様、熊本県民の皆様とともにその英姿を仰ぎ、誇りを共にする日を楽しみにしながら、私なりに微力を傾けて参りたいと思っております。

台北駐福岡経済文化辦事處 處長 戎 義 俊

台湾と日本とは、地理的にも歴史的にも切っても切れない深い間柄です。現在、両国の人的交流は大変活発で、その数は年々増加の一途をたどっています。昨年（2016年）訪日した台湾人は429万人、訪した日本人は約200万人で、合計約629万人もの往来がありました。台湾外交部（外務省に相当）の昨年の調査によれば、台湾国民が行きたい海外旅行先の第1位は日本であり、好感度を持つ国として7割以上が日本と答えています。また、日本の皆様による台湾旅行も年末年始やゴールデンウィークの旅行先として第1位になるなど、両国の友好関係は大変良好です。このような交流が出来ておりますのも、お互いに好感を持ち、お互いに信頼し合っている証であると心から嬉しく思っております。

よく台湾は世界一の親日国家であるといわれますが、その理由のひとつとして“報恩”があげられると思います。日本統治時代といわれる1895年からの50年間、かなりの日本人が麗しき島（フォルモサ）と呼ばれていた台湾に渡りました。九州からも教師・技師・医師など2万人あまりの人々が台湾へ渡り、鉄道、港湾、道路、上下水道などの基本的なインフラ整備や教育に尽力し、台湾を近代化の道へと導いたといわれています。自らを顧みず犠牲になった日本人も少なくありません。そのような日本人が「日本精神」をもって台湾に遺した功績を台湾の人々は忘れておらず、“たとえ一滴の水でも受けた恩義は湧き出る泉として恩返しをする”という「滴水之恩，湧泉以報」の気持ちを持ち続けているのです。2011年の東日本大震災、そして2016年の熊本地震への台湾からの援助の大きさにも表れていると思っています。

熊本県益城町出身の志賀哲太郎先生は、日本統治が始まってわずか1年後の1896年12月、「教育勅語」に示される徳を教育の根本理念とした台湾子弟の教育を目指し、単身台湾に渡りました。当時の台湾は日本統治に反対する者も多く、同じ年の元旦には、ゲリラの襲撃を受けた六名の日本人教師（六氏先生）が殉職したばかりで、教育制度も定まっていない状況でした。

1899年、志賀先生は台中の大甲に縁を得、開設されたばかりの大甲小学校の代用教員となりました。教育への理解がまだ浅い大甲で、先生は「人権尊重」「公平無私」の態度で大甲民に向き合い、“礼儀”や“時の観念”など身をもって範を示し、それを継続されました。他に転勤のない代用教員としての道を自ら選択し、26年間にわたる大甲での教え子は千余人にのぼり、後に台湾各界で活躍する人物を数多く輩出しました。先生はいかなる時でも日本精神をもって教え子たちに接していましたが、師弟愛が深ければ深いほど苦悩は深まり、ついに自ら死を選びます。まさに台湾子弟の教育に身を捧げたのです。教え子のみならず大甲民は皆、先生の死を悼み哀しみ、神様に礼拝するが如く、道ばたに線香を立て、供物を並べ、哲太郎の葬送の列を見送り、大甲の街全体が喪に包まれたといえます。

大甲を見下ろす鉄砧山南麓に祀られた志賀先生は、まさに大甲の聖人として大甲民から尊敬を集め、教え子たちによる顕彰碑の建立や生誕百年祭が執り行われるなど、今でもお参りの人が絶えません。2011年12月、大甲区役所は、志賀哲太郎を大甲の「文昌廟」に入れることを決めました。文昌廟とは、学問の神様（=文昌君）が祀られている場所であり、ちょうど日本の太宰府天満宮に学問の神様と

される菅原道真公が祀られているような存在です。志賀先生は大甲の聖人、まさに神様として大甲民から崇められ、今でも遺徳が慕われているのです。

私は2013年（平成25年）4月に駐福岡総領事として着任して以来、機会あるごとに“台湾に残された日本精神”や、“日本精神こそが両国を結ぶ目に見えない強い絆である”ことについて日本の皆様にお話してまいりました。2015年（平成27年）9月、熊本県益城町で「志賀哲太郎先生顕彰会」が結成され、この度の寄稿の栄を賜り、日本精神をまさに体現された志賀先生が現代につなぐ台湾と益城町との強い縁を感じずにはおれません。台湾大甲の聖人であると同時に皆様の郷土の偉人である志賀哲太郎先生の精神を育んだ益城町には、素晴らしい日本精神が宿っていると感じます。志賀先生によって結ばれた大甲と益城の絆を大切にしながら、教育や文化を軸とした友好関係を築いていけるようにと願ってやみません。

【戎 義俊處長のプロフィール】（志賀哲太郎顕彰会事務局編集）

1953年生。台湾輔仁大学日本語科卒業（1976年）。日本慶応義塾大学研究生修士課程在籍（1983年－1985年）。2013年3月31日から 台北駐福岡経済文化辦事處處長〈総領事〉。大の親日家・愛日家として知られ、自ら「えびす・よしとし」と名乗る。九州と台湾の絆を深める活動に積極的に取り組んでいる。昨年2月1日に熊本熊本大学で行われた平井数馬先生顕彰会主催の顕彰会では「台湾に残された日本文化」と題して講演し、参加者に深い感銘を与えた。毎年、九州各県を精力的に訪問し、熊本にも年に50回以上足を運んでいる。

本顕彰会にも、発足当初から理解を示され、度々御支援を頂いている。来年（平成30年）2月25日（日）には、益城文化会館で講演をして頂くこととなっている。



平成29年3月9日 台北駐福岡経済文化辦事處を訪問

右から 植山事務局長 戎義俊弁事処長（総領事） 宮本会長 折田事務局長

■ 聖人と崇められる見習い教員

台湾威凌克股份有限公司董事長兼總經理 渡邊 崇之

台中の北西部に大甲という街がある。その郊外に標高 236 メートルの鐵砧山がそびえる。山頂から西方を望むと台湾海峡が目飛び込んでくるのが印象的だ。標高は勿論のこと、山腹の傾斜、樹木の茂み、山頂から望む海峡の景色、どこことなく 旅順の 203 高地を彷彿とさせる。ここは鄭成功が北伐で駐屯した時、剣を山に突き刺したところ甘美な泉が湧き起こったという 伝説の地として有名だ。5 メートルを超える鄭成功像を見に多くの観光客が訪れる。

しかし山腹の南側にある墓地に、ある日本人の慰霊碑があることを知る人は少ない。大甲の住民から聖人と敬愛された志賀哲太郎、その人の墓と共にこの慰霊碑はある。

志賀は公学校（台湾人子弟が通う小学校）の一介の見習い教員（当時は「代用教員」といった）に過ぎなかった。

にも関わらず、なぜ長きに渡って台湾の人々に慕われて来たのか。そんな思いを胸に、山腹の道無き草むらをかき分け、慰霊碑に辿り着いた。

志賀が大甲に赴任してきたのは 1899 年。日本による台湾領有 4 年目のことだ。当時は領台直後ということもあり、公学校とはいってもそれまで孔子・朱子を祀っていた文昌廟を 改造した程度のものであった。住民の生活は不安定で、教育に対する父兄の理解も得られず、就学率はなかなか上昇しない状況であった。

志賀は毎週日曜日に手弁当で就学適齢期の家を一軒一軒訪ね回り、根気良く教育の尊さを 説いて回った。ただ言い聞かせるだけでなく、文房具の無い者には自ら買い与え、病気の者には食べ物や絵本を持って 慰問し、学費の払えない者には自ら立替えてでも学校に通わせるなど、身銭を切った具体的な支援も惜しまなかった。また、道で住民とすれ違ふと、必ず立ち止まってお辞儀を欠かさなかった。当時そのような礼節習慣の無かった住民は驚き、尊敬のまなざしを向けたという。

時間厳守の概念が薄かった当時において、志賀は生涯無遅刻無欠席で自ら時間厳守を徹底した。学校に鐘の設置を提言し、生徒には時間を厳しく遵守させた。そして、その習慣は次第に住民にも定着して行った。こうした志賀の実践躬行する姿勢に父兄達も尊敬をまなざしを向けるようになり、就学率も向上して行った。後に大甲は台中県下第一の就学率となり、進学率も 抜群で、後に台湾の各界を支える多くの人材を輩出することとなる。



志賀の風貌には威厳があり、当初生徒達はその雰囲気呑まれ、恐れ慄いていたが、接するとすぐにその実直で温厚な性格が分かり、打ち解けて行った。しかし、遅刻など時間を守らない生徒には厳しく接した。志賀の教育方針は「慈悲」「儉約」「でしゃばらない」というもので、徳育を最優先させた。

志賀は 1865 年熊本県上益城郡津森村に生まれた。この地は教育熱心な土壌だったようで、志賀も幼少より読み・書き・そろばんの手ほどきを受け、18 才で四書五経、陽明学、仏書、英書も師について学んで

いる。22才の時、上京し東京法律学校で学んだが、父の死により25才で帰郷。紫溟会に入って国権党员となり、九州日々新聞の記者として政治活動に挺身した。しかし、当時の政治闘争に失望し、29歳で政界から離れ、一時地元の教師なども勤めたが、日本の台湾領有を機に新天地での教育に希望を抱き、31歳で渡台した。3年後に大甲に赴任し、26年間一貫して大甲での教育に従事している。

志賀の地道な努力により大甲から数々の人材が輩出されるという功績。反面、大正に入り民族運動機運の高まりを受けた教え子達が次々と民族運動に身を投じて行く危険性。総督府はその功罪両面を持ち影響力の大き過ぎる一介の代用教員を正式教員へと昇進させ、本格的に官吏として取り込もうとした。しかし、志賀は権力と自己保身の象徴に見える官服を着て、転勤を繰り返す正式教員の生活を嫌って、昇進の誘いを断り続け、一代用教員を貫き、常に住民と共に寄り添ったという。総督府の強大な権力を背景にした官吏による圧迫は住民を度々困惑に陥れた。志賀は過去に政治活動をしていた時の人脈から、総督府にも知己が少なくなかった。その為、住民に変わって陳情に奔走することも多かった。

そんな異色の経歴を持つ代用教員の存在を、日本人官吏が快く思うはずが無い。常に厄介者扱いをされ、様々な嫌がらせも受けたようだ。それでも志賀は己の信念を頑として貫いた。しかし、一代用教員とはいえ官の禄を食む者には変わりない。内地から来た日本人官吏としての立場、台湾人の民権、民族運動の狭間での葛藤は時代の流れと共に深まって行くことになる。そして、遂に公学校の教師からも熱心な民族運動活動家が出現することになり、苦悩の末、志賀はとうとう自決の道を選ぶ。1924年12月29日、真冬の池に紋付き袴姿で15キロにもおよぶ大石をくくりつけて入水自決をしたのであった。

桑野豊助氏著書の「台湾大甲の聖人志賀哲太郎伝」には下記のような記述がある。

「官吏は凡（すべ）て自己保身、官服に身を固めて空威張りするばかりで、台湾人の中に融け込もうとの意欲は一かけらも有しない。先生の行動は常に台湾人の味方であり温かった。台湾人に対しても日本人と同一として自主独立の精神を傷つけず、良心の命ずるまま少しも恐れることなく教えていた。ひたすら台湾人子弟の味方として終始した。台湾人の味方となることは上司や他の教師から排斥されるか、下手をすれば警察から引張られる危険があった。しかし先生は身を賭して台湾人の味方となられたものでこのことが皇化の実を挙げる日本教師の義務だと信じられたようである。教え子の多くと公学校教師中にも民族運動の熱心な挺身者が出るにおよんでついに自決の拳にでられたもののようである」

公学校の運動場で行われた葬儀には1キロを超える長い行列ができ、出棺の際に通る道の両脇には住民が志賀への哀悼の意を表して供えた品々が溢れ返り、途切れることが無かったという。

1926年、教え子達によって墓碑が建てられ裏面には墓碑銘が刻まれていた。死因は敢えて「過労死」と記された。

そして、時代は戦後へと移る。1958年、日本政府と協議の下、中華民国政府は日本人墓地を一か所に終結させることとした。しかし、志賀の教え子達による強烈な反対に遭い、結局志賀の墓だけは移転を免れた。更に1966年には志賀先生生誕100周年祭が墓前で挙行された。



現在の慰霊碑はこの時に建立されたものだ。碑には「志賀先生之碑」と刻まれている。この碑文はなんと当時の政権で 行政院長（首相）まで務めた孫科（孫文の第二子）による揮毫だ。

これまで本コラムを読んで頂いている読者なら、国民党政権の対応に違和感を感じられても 当然だろう。この時代に、国民党政権の方針に堂々と抗ったり、日本人を堂々と祀ったりすること など到底できる時代では無かったにも関わらず、それが易々と実現してしまっているのだ。更には当時の政権にいた中枢人物による揮毫までなされているのである。その疑問は、当時の台湾の新聞が志賀を反軍国主義者、抗日闘争の英雄として扱っている ことで、一定の理解を得ることができる。しかし、大甲の住民はその時代時代の政権から着色された志賀の評価に翻弄されること無く、ただひたすら志賀の遺徳を偲び、手厚く葬った。

慰霊碑の建立後、山腹で地滑りが起き、墓や慰霊碑が埋もれてしまったことがあった。その後、教え子達はそれらを守るかのように、次々と山腹の上方に自らの墓を建てた。現在は慰霊碑の上方はコンクリートで固められており、山崩れなどは起きても頑丈に 防護されているかのように守られている。実際に上方の墓碑を見ると、自身の生誕日を明治の元号で記していることの多い事に気づく。きっと、その時代に志賀に師事できたことを誇らしく思いながら眠っているのだろう。

志賀の死後、既に 88 年が経過している。さすがに教え子が存命の確率は限りなくゼロに近い。どの故事も時の流れには抗えない。故人から直接影響を受けた世代が過ぎ去ると、急速にその故事も色あせてしまうものだ。慰霊碑に辿り着くまでの生い茂る草むらは暫く人が通っていないことを物語っている。このまま時代と共にこの故事も葬り去られてゆく運命にあるのか。後世である我々は、時の政権による評価の変遷、台湾人、日本人という民族の違いを乗り越えて、志賀哲太郎の生き方を再検証し、語り継ぐ使命があるのではないだろうか。

筆者紹介： 渡邊 崇之（台湾威凌克股份有限公司董事長兼總經理）



1972 年生まれ。中央大学卒。学生時代に、東京都主催の青少年洋上セミナー訪中団、旧総務庁主催の世界青年の船、青年韓国派遣団へ参加。バックパッカーとしても世界約 50 カ国を歩き回る。特に中国・韓国へは数を多く足を運び、北京での留学や釜山での日本語教師生活の傍ら、旅行・貿易・小売業を手掛ける。

1996 年、日本の一部上場経営コンサルティング会社に入社。数々の支援先フランチャイズ本部の店舗ビジネス立上りや上場支援に携わる。2004 年、アジア担当役員として「台湾經由中国戦略」を提唱し、実際に台湾・香港・中国に子会社を創設する。その後台湾に移住。2010 年、会社の戦略変更により、同社を退社してアジア各社を MBO。自ら事業を継承することとなる。

現在は在アジア日系企業の経営支援、及び日本企業のアジア進出支援コンサルティングを手掛ける一方で、アジア各地で実際に複数業態の店舗ビジネスを展開している。多くの中国・韓国青年達と交流した経験からアジア近代史への問題意識が強く、帰国後もその研究を続ける。台湾移住後は、主に台湾と日本の歴史的関わりを研究。特に台湾の日本語世代との交流が深い。

※ 本稿は、渡邊崇之氏の御好意により氏のHP（2012年作成）から転載させて頂いた。

※ 台湾威凌克股份有限公司については、同社のHP「LinkBiz 台湾」を御覧頂きたい。同社の交易事業の実績だけでなく、志賀哲太郎先生その他の先人の顕彰活動や日台交流の推進事業における、渡邊氏の並々ならぬ篤い思いを伺うことができる。

（志賀哲太郎顕彰会事務局）

■ 「志賀哲太郎小傳」 抜粋

本会発行物編集部会長 松野陽子（益城町文化財保護委員）

本会が志賀哲太郎先生の顕彰を行うに当たって、私とその主筆を担当し今春出版した伝記「志賀哲太郎小傳」は、それまでの志賀先生に関する唯一の伝記である「志賀哲太郎傳」（桑野豊助著・昭和49年刊行）をもとに、本会による新たな調査の成果等を踏まえ、若年層から高齢者層まで幅広く一般の人々にも読みやすいものになることを心掛けて、編集したものです。

今春発行の会誌1号でその抜粋をお示ししましたが、今回、会誌2号においても、志賀先生のお人柄や生き方がよく表れている部分を抜粋し、お読みいただくこととしました。

【一 生れ故郷 から】

志賀哲太郎(幼名・岩太郎)は、慶応元(一八六五)年八月二十八日、熊本県上益城郡田原(たばる)村(現益城町田原)三百三十番地で、父志賀甚三郎・母ジュカの長男として生まれた。

哲太郎が生まれ育った津森は、阿蘇外輪山の俵山の西に位置し、緑深き低い山々に囲まれ、阿蘇の伏流水が各所から豊富に湧き出る水清き里である。また、近代日本において、女子教育や婦人解放に尽力した「四賢婦人」と称される竹崎順子、徳富久子、横井つせ子、矢嶋楯子(やじまかじこ)姉妹の出身地であり、哲太郎よりも二年早く生まれた徳富蘇峰の生誕地でもある。

杉堂には潮井神社があり、熊本名水百選に選ばれた潮井水源から豊富な水が湧き出ている。田原に西本願寺派の浄信寺が、寺中(じちゅう)には津森神宮、下陳(しもじん)には千光寺など古い歴史を示す遺跡が点在する。益城町を代表する神社の一つである津森神宮は、宝治元(一二四七)年に現在地に遷されたとされている。境内には多くの巨木があり、荘厳な神殿、拝殿、楼門のたたずまいは、旧津森郷社としての姿を今も残している。また、津森神宮の祭礼「お法師祭」は益城町、西原村、菊陽町の十二地区を一年ごとにまわる祭りとして、広く熊本県民にも知られている。

地勢的に津森は山間の村落で、谷に沿って川が流れ狭小な畑地を二分し、その両岸に村落が点在する。潮井水源の伏流水は布田(ふた)川に流れ入り小谷(おやつ)で木山川に合流し、そこから一キロメートル程下ると谷間を抜け、開けた平地に至る。木山川は、昔は物流の水路として舟が往来し、陸の荷車と共に地域の経済を支えた。今も農業用水として田畑を潤す重要な河川である。

明治八(一八七五)年頃、政府高官を辞して故郷の杉堂に帰り県会議員となった矢嶋直方(なおかた)は、約三〇名の津森村民を宇治に修行に出し、京都からお茶の技術を導入し茶産業を興した。また養蚕業をも奨励し絹織物が盛んな時期があった。

河川土木では矢嶋直方の祖父矢嶋弥平次が錦帯橋の工法を取り入れた石組の眼鏡橋を架ける等、治水事業により農産物の増産を図り、村の経済基盤を築き上げた。このため津森村は早くから豊かな村として発展した。特に学校教育制度が確立するまでは、他に先駆けて地元の郷土が私塾を開き、子どもたちに読み・書き・算盤・道徳などを教えた教育村でもあった。

【二 少年期の教育 から】

明治五年、学制が発せられた頃の県下の小学校数は十五校程度であったが、明治七年には四十六校に増え、明治九年には五百六十九校、明治十二年には六百六十五校に増えている。中学校は明治九年に一校だけ開校され、教員を養成するための師範学校は明治七年に設立された。

学制発令後も津森地方は小学校の開校が遅れたことと、身分制度がまだ色濃く残っていた時代であったことから、鍛冶屋の息子である哲太郎は私塾に通ったが、そこでの学業が志賀哲太郎の人間形成に大きく影響することとなった。日頃は学業の傍ら、ふいごの火起こしから向う鈍まで打って、父を助けるという孝行少年でもあった。

[四 青年期の理想と挫折・渡台決意 から]

西南の役の激しい戦いは、幼い哲太郎の心にも大きな衝撃を与えたであろうが、この頃の哲太郎は、中村傅兵衛による手習いが楽しみで、木山の塾が休みの時は、家の手伝いを済ませると、中村家に行って四書五経の本が納められている書籍箱から、前回習った本を取り出し声を出して読んだ。母ジュカも哲太郎の向学心を見てとり、一鍛冶屋の倅として終わらせるべきではないと思うようになり、経済的に苦しくはあったが、哲太郎を木山の塾に通わせ続けることに躊躇(ためら)いはなかった。

明治十六(一八八三)年三月、十八歳のとき江津湖畔の「神(くわ)水(みず)義塾」に通い始めた。津森から二里(約八キロメートル)の道のりを、毎日足取り軽く楽しく通ったという。

この塾は、明治十四(一八八〇)年に中西牛郎(うしお)(号・蘇山)が開いた私塾で、漢学や洋学に造詣の深い中西から四書五経、陽明学と英語を学び、仏教書を八淵蟠龍(やぶちばんりゅう)に学んだ。中西牛郎は、「神水義塾」を開く傍ら、佐々友房らが開いた「済々黌」で教鞭(きょうべん)をとっていたが、政党ができると「紫溟(しめい)雑誌」「紫溟新報」記者となり、仏教も研究した。明治二十一年にはアメリカへ遊学し、のち台湾へ渡り、台湾総督府の囑託として活躍した。

哲太郎は明治二十(一八八七)年二月、二十二歳の時上京、明治法律学校(現明治大学)に入り法律を専攻した。家からの仕送りも乏しく、法律書を購入するため食費を抑えるなど節約しながら学問に励んでいたが、同二十二(一八八九)年十二月、父甚三郎が死去したため志半ばにして学業を断念し帰郷することになった。

翌二十三(一八九〇)年、佐々友房や古荘嘉門らを中心に結成されていた政党「紫溟会」に入会し国権党员となり、九州日日新聞の記者として採用された。この頃、古荘嘉門、佐々友房(号・克堂)、安達謙蔵(号・漢城)や宮崎滔天(とうてん)らとの交流が生まれた。

[七 台北時代 から]

哲太郎が台北に来たのは一八九六(明治二十九)年十二月である。日本による台湾占領後一年、戦塵はまだ収まらず、抗日ゲリラも各所に蜂起しており、台湾の人々にとってはまだ現実を受け入れ難い状況であった。しかし、日本にとっては、先進の欧米資本主義国を尻目に日清戦争を戦って、初めて植民地を獲得したのであるから、日本人の意気は軒昂(けんこう)たるものがあった。

一八九六(明治二十九)年に台湾総督府条例が施行され、行政機構を整備するにつれて役人の登用が行われた。給与は植民地加給として六割がプラスされるという高給でもあり、新天地に夢をかけた人々が日本から続々とやって来た。

日清戦争直後の日本の経済状況は思わしくなく、政府は国内の充実をはかることに忙しく、国勢を伸長する余裕もなかった時ではあったが、台湾の領有によって海外発展を図る経済的必然性に迫られたことは、不景気時代にまさに天の恵みであった。

台湾は気候が温和で、天然資源に富み、土地は肥えており、欧州帝国主義列強の植民地獲得合戦の好餌(こうじ)と目されていただけに、日本国民の台湾に寄せる期待は大きかった。台北を始め全島各地に破壊と建設の槌音(つちおと)が響き、台湾ブームが巻き起こりかけていた。

[十 文昌廟時代 から]

その後、新たな職を求めて熊本県人が多く住むという台中に向かった。新竹まで汽車で、そこからは徒歩で台中の縦貫鉄道の終点であった北部山中の伯岡坑に向った。そして、伯岡に居を求め、建設中の台湾縦貫鉄道工事の御用達商として生計を立てることになったが、一人では仕事もはかどらず、留守番役を兼ねて女中を雇った。名を島村ソデ(袖)といい、出身は熊本県河内町ということであった。

或る夜、土匪(現地のゲリラ)の襲撃に遭い財物は取られ、危うく命を落とすところであったが、女中ソデの機転により助かった。しかし悪いことは続くもので、哲太郎はマラリヤに罹(かか)り重

症になった。その時担ぎ込まれたのが、陸軍衛戍病院にあてられていた大甲の鎮瀾宮(ちんらんぐう) (媽祖廟)であった。九死に一生を得た彼はソデの看病を受け療養に努めた。(注:媽祖廟は治病・航海の神様とされ、大甲媽祖巡行は世界三大宗教行事の一つに数えられる。)

渡台後の自分の行動を反省した哲太郎は、一八九八(明治三十一)年から小学校、公学校が開設されたことを機に、教育者に戻ることを決意した。

病が良くなると、かねていざという時に役立てようと貰っていた安達謙蔵の紹介状を持って、家永泰吉郎苗栗(びょうりつ)弁務署長に面会し、教員採用を願い出た。

家永泰吉郎は佐賀県東松浦郡唐津町の出身で、尋常中学校教諭から一八九五年に通訳官として台湾北部にある基隆(きーるん)に到着。台湾総督府雇員心得となり、台北支庁書記官、総督府法院判官、苗栗庁長、新竹庁長などを歴任し一九一四年に退官している。熊本国権党総理の古莊嘉門(台湾植民隊)が一八九五年に陸軍省雇員大本営附として台湾に向かい、このとき家永と行動を共にしており、嘉門は一八九五年四月、総督府民生局内務部長(学務も含む)に就任している。このような二人の関係から、哲太郎は安達に紹介状を書いて貰っていた。

家永署長は、安達先生の紹介であり、学識、人柄も判ったので一も二もなく採用。哲太郎は、開設されたばかりの大甲公学校の代用教員として、高給をもって雇われることとなり、明治三十二年四月から「苗栗庁雇員」という資格で教鞭をとることになった。

[十 文昌廟時代 から]

鎮瀾宮(媽祖廟)内の陸軍衛戍(えいじゅ)病院で療養中であった哲太郎が病も癒え、家永署長の好意により、公学校の代用教員として苗栗弁務署雇(やとい)の辞令を受け、媽祖廟から文昌廟(ぶんしょうびょう)に移ったのは、一八九九(明治三十二)年二月のことである。住居は文昌廟の西庇(せいひ)を日本式に改造した六畳二間に台所という粗末なもので、採光も悪く、そこに女中ソデとの二人暮らしが始まった。



金子校長は哲太郎より十五歳年下であったが、磊落(らいらく)な人で、哲太郎とよく気心が合った。また、同じ雇いの台湾人の好青年汪清水先生と共に、三人は和氣藹々(あいあい)として生徒の指導に当たった。当時の哲太郎の俸給は三十円。雇だから植民地加俸がなく、汪先生は十四円五十銭、金子校長は四十円に加俸六割がついていたようだ。田舎のことであり、物価も安く、快適な生活であった。

哲太郎は、貧乏な子には石筆時代には石筆、鉛筆時代になってからは鉛筆、紙を与え、病気の子には家庭を訪問して、牛乳、菓子や果物、福神漬、絵本を持って見舞った。ある時、生徒の一人が足に釘を踏み込み、赤く腫れあがって学校に出てこられなくなった。この事を聞くと哲太郎はすぐ生徒の家へ行き、その子どもを背負って登校したのである。家が貧しく学業が続けられない子どもには学費を援助するなど、哲太郎の対応は温情あふれるものであった。

しかし、教室では厳格であった。分からぬ子には手を取るようにして教え、学習を怠る子には体罰を与えるという風で、教え子の多くは先生に叩かれたと言っているが、これは、子どもたち自身納得の上での愛の鞭であった。

哲太郎は漢学の素養が深く、国語が得意で習字も上手(うま)かった。算術も確かだった。体操や唱歌以外は教え方も上手く、特に修身に至ってはお手のもので、四書五経で鍛えられた知識をもって、様々な話をし、生徒は先生の話に耳を傾けて熱心に聞いた。

彼は五尺七寸(一七二cm)と背丈が有り、いかつい顔つきであったので、生徒は最初先生を見て各々「くま」とか「いのしし」とかあだ名をつけていた。しかし、外貌に似ず根がやさしいので、後ではあだ名で呼ぶ者もなく「志賀先生」「哲太郎先生」と呼び、慈父の如く慕った。



台湾では当時、就学率が低く教育に対する理解が浅かった。このため開校当初の児童数は十数名であり、その中でも卒業したのは明治三十七年次には四名だけという状況であった。哲太郎は、学齢期の子供のいる家や、せっかく入学しても休んでいる子供の家を、一軒一軒丁寧に訪ねて廻った。太陽に照りつけられながら石ころ道を着物、袴の姿で、流れる汗を拭き拭き、一時間も二時間も歩いて各家庭を訪ねた。言葉の不十分なところは教え子を通訳として親たちを説き伏せる。薄暗い納屋の中でも、木陰でも、泥まみれの百姓でも、年老いた祖父母たちとでも懇々(こんこん)と話し込み、学校に行かせるよう勧めた。また、欠席の子には、明日は必ず出席するように言い聞かせた。子ども達も哲太郎の熱意に負けて出席するようになり、無理解の親たちも通学させるようになった。彼の熱意と愛情と誠心が大甲の人々に溶け込んで、大正期には、生徒数も着実に増え、一九二三(大正十二)年度の卒業生は百名に達した。出席率も県下一となり進学率もぐっと高まった。

哲太郎は二十六年間、代用教員として終始した。彼の信条によれば、台湾官吏は文官服に剣を吊っているが、剣を吊っては教育を行えない。教育は威圧ではない。子どもの知能を啓発し育てるもので、役人根性を以てこれを律することは教育の道に反する。この信念が彼を一生和服、袴で通させた理由である。普通の人なら台湾に来て、一年か二年もすると大抵、雇(やとい)から判任官となり、文官服を着て剣を吊る。しかし彼は一生和服の雇で通した。官吏側は幾度となく、哲太郎を正教員にしようとしたがこれを固辞し続けた。任官すると、庁の命令でどこへでも転勤しなくてはならない。転勤とは大甲を離れることである。大甲を愛し、大甲を離れることは絶対に拒否した。教え子が師範学校を卒業して帰って来ると、正教員で席次は哲太郎の上になる。しかし哲太郎は平気で、酒が廻るとよく「おれは御(お)のつく雇で、台湾の御雇(おやとい)だ」と言って誇りとしていた。

このため哲太郎の履歴書は学歴なしとなっていた。四書五経から陽明学まで学び、明治法律学校で法律を専攻した哲太郎は、一生を大甲子弟の教育に捧げ、この地で終わる覚悟を決めて「学歴なし」としたのである。栄達を願わず、二十六年間、代用教員として終始したことは、総督専制、警察政治の圧迫、税の苛酷な要求などに対する台湾人の窮状を少しでも精神的に緩和し、台湾人の楯ともなることによって、善良な日本人としての気概を示したものと推察される。

官服に身を固めて空威張りするばかりの官吏の中であって、哲太郎の行動は常に台湾人の味方であり温かかった。学校での授業ではやさしく、放課後も生徒達を集めてはよく話し合い、人生訓を垂れた。

◇

子どものいない哲太郎は、教え子を自分の子どものように可愛がり、正月には子ども達を沢山呼んで御馳走した。卒業して何年たっても変わらず、みんなで飲んで、食べて、歌ってドンチャン騒ぎをするが、彼はそれを共に楽しみ、共に喜び、共に祝った。この正月の招待の宴は毎年続いた。また、教え子の家に招待されることも多かった。どこでも羽織袴姿で、ブルドッグのような髭をつけた哲太郎を台湾人が囲んで一緒に盃をあげる光景は愉快である。教室や学校を離れても教え子とは一体感を持ち、親近の情を忘れない哲太郎を、教え子たちは慈父の如く、神の如く尊敬した。

彼の教え子は、二十六年間で千余人にのぼっている。文昌廟は文昌帝君を本尊として祀る学問の神様である。その神像の前に机、椅子を並べた寺子屋式の学校で、生徒数も少なかったのも、先生と生徒との間は親しみ易く、金子校長の人格、哲太郎の慈父の情に、台湾の子弟もすっかり馴染んでいった。

かくて、生徒数もだんだんと増加し、明治四十年に学制が改革され、義務教育が四年制から六年制に延長されることになった。この頃には、文昌廟では生徒を収容する余地がなくなり、庁・街の計らいで、大甲街三堡、現在の順天路に新校舎を建設し、そこに移転することとなった。官舎も構内に建てられ、金子校長も、哲太郎も新しい官舎に移った。

[十一 三堡校舎時代 から]

三堡の新公学校は、金子校長を中心に、文昌廟時代と同じく和気藹々(わきあいあい)、校長と哲太郎はお互いに尊敬しあい、生徒たちもよくなつき、学業の成績もぐんぐん上がっていった。教材のない生徒には教材を支給し、欠席の生徒は見舞い品を持って家庭を訪問し、父母兄ともよく懇談していた。生徒の家からの招待にも快く応じ、相談にも乗っていたことは、着任以来一貫した行動であった。

文昌廟の公学校跡は、日本人小学校の分教場になっていたが、台湾人子弟は昔の事が忘れられず、文昌廟に行っては、教室を覗いたり、廟庭で遊んだりしていた。それが日本人小学校の授業の邪魔をするということで、分教場主任が台中庁に訴えたので、金子校長の監督不行き届きということになり、一九一三(大正二)年に校長は休職になった。その裏には、金子校長が台湾人と仲が良すぎると密告した者がいたという事情もあった。全校挙げて留任運動を起こしたが、力不足で、校長は辞任するに至った。哲太郎はじめ街民の受けた衝撃は強かったが、家永署長も去り、行政区域も変わり、大甲支庁始め監督官吏も代わってしまい、どうにもならず、総督専制や台湾人軽視を非難するよりほか無かった。

後に、金子校長は一九三八(昭和十三)年十二月三十日脳溢血で亡くなる。享年五十五歳だった。翌年、教え子によって記念碑が建てられた。

[十二 民族運動 から]

明治末から大正時代に入ると、教育を受けた台湾青年たちが急速に民族運動に目覚めて来た。その種子は皮肉にも板垣退助の台湾訪問にあった。

一九一四(大正三)年十一月、植民地視察の名目で台湾を訪れた板垣は、「民衆の枠を越えて、台湾人は日本人に同化し、日本人は台湾人に同等の待遇を与えるべきだ」と唱え、台湾の人々に自由思想を説き交友を深めて行った。そして、同年十二月二十日、台北で日台青年三千余名の会員を擁する「台湾同化会」を組織したのである。このことは総督府の逆鱗にふれ、翌年一月二十六日に解散を命じられ、板垣は追放同様に台湾から退去させられた。しかし、板垣が説いた自由平等は、台湾の人々の人間的目覚めをうながすことになり、その影響は計り知れないほど大きかった。

板垣退助が去ったあと、彼の播いた種子からすぐ第一の芽が吹き出してきた。台湾青年の中心人物であった林献堂が、台湾解放運動のため立ち上がったのである。林献堂は、台中霧峯の出身で、先祖代々の大地主であり、彼自身は早くから漢文を習い、日本の近代教育にも接して青年時代を過ごした。板垣の台湾訪問でその近代自由思想に開眼し「同化会」に参加して、台湾解放運動に先鞭をつけてきたのである。板垣が去り、同化会が解散させられても彼の熱意は衰えず、郷里の霧峯や台中市を中心に活動し、その政治実践の第一歩として、台湾人子弟にも中等教育が与えられるべきだと主張し、これが「私立台中中学校」の設立申請となった。

一九一五(大正四)年、林献堂たちの努力が実って台中中学校の設立が実現する。林献堂は中学校の設立だけでなく、優秀な人材の育成に尽くした。私財を投じて台湾青年の東京留学を援助したのである。

そして民族運動は広がり、一九二五(大正十四)年には大甲農民組合の争議、一九二六(大正十五年)には大甲で農民と警察の衝突が起こる。

◇

大甲公学校の岡村校長は、台中州庁から、若い教師に解放運動を止めさせるよう通達があったものの、校長の力では如何ともしがたく、哲太郎を教諭心得に昇格させ、哲太郎を利用し解放運動を止めさせようとした。このとき、哲太郎は、齢五十半ばを過ぎており、もはや異動なきものと観念して教諭心得となることを受けたのであった。日頃から哲太郎の存在を疎ましく思っていた校長としては、哲太郎を上手く昇格させたので意のままにできると思っていた。しかし哲太郎は教え子の

立場に立ち続けたため、とうとう左遷の憂き目に遭い、生徒を教えられない立場に引き下ろされたのである。

このことが哲太郎にとって精神的な打撃となり、更に教え子や公学校教師の中にも民族解放運動に身を挺する者が多く出るに及んで、志賀個人の手ではなす術(すべ)もなくなり、ついに自決を決意したのである。

[十三 自決と葬儀 から]

葬儀は正月を控えてのことなので、翌三十日に執行することとし、教え子たちの手により、急遽準備された。式場は公学校の校庭の西側に大きな黒白の天幕が張り巡らされ、中央の一段高い祭壇に柩(ひつぎ)を花で飾り、机の上には様々な供物や祭具が並べられ、右側に遺族席が準備された。遺族がないのに遺族席を準備するのはどうかと思った人もいたが、教え子の長老たちが先を争ってその席に着いた。大人がだんだん増えてきて、子どもたちは端の方に押しやられ、前の人との首の間から祭壇を眺めねばならぬ程大勢の住民が参列した。

導師は台中の日本人和尚大野鳳(ほう)洲(しゅう)師が務め、五人の従者ととも祭壇に上った。太い読経の音が四方を圧して聞こえると、辺りは水を打ったように静まり返り、荘厳な空気が会場を包んだ。読経(どきょう)の声につれて、遺族席に座っていた教え子たちがハンカチを出して涙を拭(ふ)きだし、それが次々と拡がり、すすり泣きの声があちこちから聞こえた。弔辞を読む人が嗚咽(おえつ)で声をつまらせ涙を拭くと皆も泣いた。多くの弔辞、弔詞が寄せられたが、いずれも切々たるもので、哲太郎の遺徳を偲び、その死を惜しむ情にあふれるものばかりであった。式場外では、台湾式に千余の爆竹が鳴らされ、大甲の街は喪(も)に包まれた。

「弔 辞」

大正十三年十二月三十日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。

先生は、明治三十二年二月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘二十有六年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる。その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気を奪い、遂に惱殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす。嗚呼哀しいかな。聞けば往時、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出慮し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、二十六年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す。大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高楼に入り、我れ情誼の校舎に起居す。彼、巨万の富を有するに対し、我数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、國家に尽すは一にして、いずれが貴きか未だ量る能はず。不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり。然るに名慾利情に勝つ先生は、終に、健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし。志賀死すとも徳は死せず、不肖を薰化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はむことを。

門下生 吳淮水 敬拝

遺言には、

- 一、自分の遺体は台湾式の土葬にすべし
- 一、書物はすべて大甲街民に寄付すべし
- 一、遺産は女中ソデに給えるべし

とあった。

※ 詳細については、別途刊行の「志賀哲太郎小傳」をお読み頂くようお願いしたい。

■ 資料で辿る志賀哲太郎の足跡

本会アドバイザー 増田隆策 (郷土歴史研究家・元山都警察署長)

志賀哲太郎先生は、活躍の場が台湾であったため、郷里熊本でも、ほとんどその功績は知られていません。

江戸末期に、徳富蘇峰と2年違いで前後して益城町で生まれ、若い頃は、ともにジャーナリストとして活躍されながらも、終生脚光を浴びた蘇峰と異なり、その後半生を一介の雇教員として台湾の子どもたちの育成のために捧げた先生の生きざまには、常人には思いも及ばない高邁な精神が随所に見られます。

志賀先生の研究を始めて数年経ちましたが、直筆の資料が全く発見されないなど、先生に関する資料の発掘は依然として困難な状況にあります。それでも、伝聞を裏付ける傍証的資料があちらこちらで徐々に見出されつつあり、来春には、それらをまとめて「資料集」を刊行したいと思っています。

先生の偉大さは、その信条が言葉も習俗も異なる異国の人々にも受け入れられ、そればかりか「聖人」と称されるまで敬愛された点にあります。私達は、もの言わぬ聖人の姿を、それを見た人々の目を通してしか知ることができません。

色々な資料を複合的に考証し、先入観を排除しながら研究を進めたいとは思いますが、研究者は、常に、自分の研究手法に縛られる危険性と隣り合わせにいると言われます。

これまで、生誕から没後の顕彰事績に至るまで、50余りの項目に分けてまとめた資料を作成しましたが、今後も多角的に検証を重ね、皆様の忌憚のないご意見やご叱正も頂きながら、台湾に残っている資料や台湾の研究者の成果物も調査して、謎に満ちた「聖人」の姿を事実に基づいて明らかにし、先生の真の遺徳を多くの人々に伝えて行きたいと思えます。

前号の18項目の資料は少し詳し過ぎたように感じたため、今回は、先生の台湾における事績を中心に9項目にまとめ直し、読みやすく、理解しやすいように配慮しました。

あらためて志賀先生の崇高な足跡を辿って頂ければありがたく思います。

(資料一覧)

- 1 墓碑
- 2 大甲公学校に代用教員として採用
- 3 慈父の如く
- 4 礼節を重んじる
- 5 政界闘士の前歴
- 6 民族運動と総督府の狭間で苦悩
- 7 自決
- 8 教え子の追慕
- 9 志賀記念室と慰霊祭

1 墓碑

大甲区は台中市の西北に位置し、古くは台湾中部の行政の中心として商業が栄え、中国大陸との交易の要衝であった。この街の郊外に鐵砧山（てっちんざん）という台湾海峡を見渡せる山がある。この山は武将「鄭成功」ゆかりの名所であり、訪れる人が多い。その山麓に日本人教師「志賀哲太郎」の墓と記念碑が建っている。台湾における日本人のものとしては、戦前から守られる墓石と戦後建てられた記念碑は稀な存在である。日本ではほとんど知られてないが、志賀は「大甲の聖人」と称えられ、その遺徳は今に伝えられている。墓誌銘には「永久に尊敬を伝えるためこれを記す」とある。



鐵砧山



志賀先生の碑



志賀先生の墓

2 大甲公学校に代用教員として採用

志賀が台湾に渡ったのは台湾領有の翌年の明治 29（1896）年、30 歳の時だった。台湾語習得の目的を兼ねて台北で酒店を営業するがうまくいかず、その後大甲近くの伯公坑で同郷河内村出身の島村袖を雇い、台湾縦貫鉄道の御用商を営んだ。ある夜、土匪（抗日ゲリラ）の襲撃に遭い財物は取られ、危うく命を落とすところであったが、袖の機転により助かった。しかし、マラリヤにかかり危篤に瀕し、担ぎ込まれたのが大甲の鎮瀾宮（ちんらんぐう）の陸軍病院であった。九死に一生を得た哲太郎は袖の看病を受け療養につとめた。療養中に教員採用の募集を知り、弁務署で面接を受けて明治 32 年大甲公学校（小学校）の代用教員として着任した。当時の大甲公学校は文昌帝君を祀る文昌祠を使用し、志賀は文昌祠西側の一室を借りて住居とした。



当時の文昌祠西側の居所入口



現在の文昌祠と運動場跡



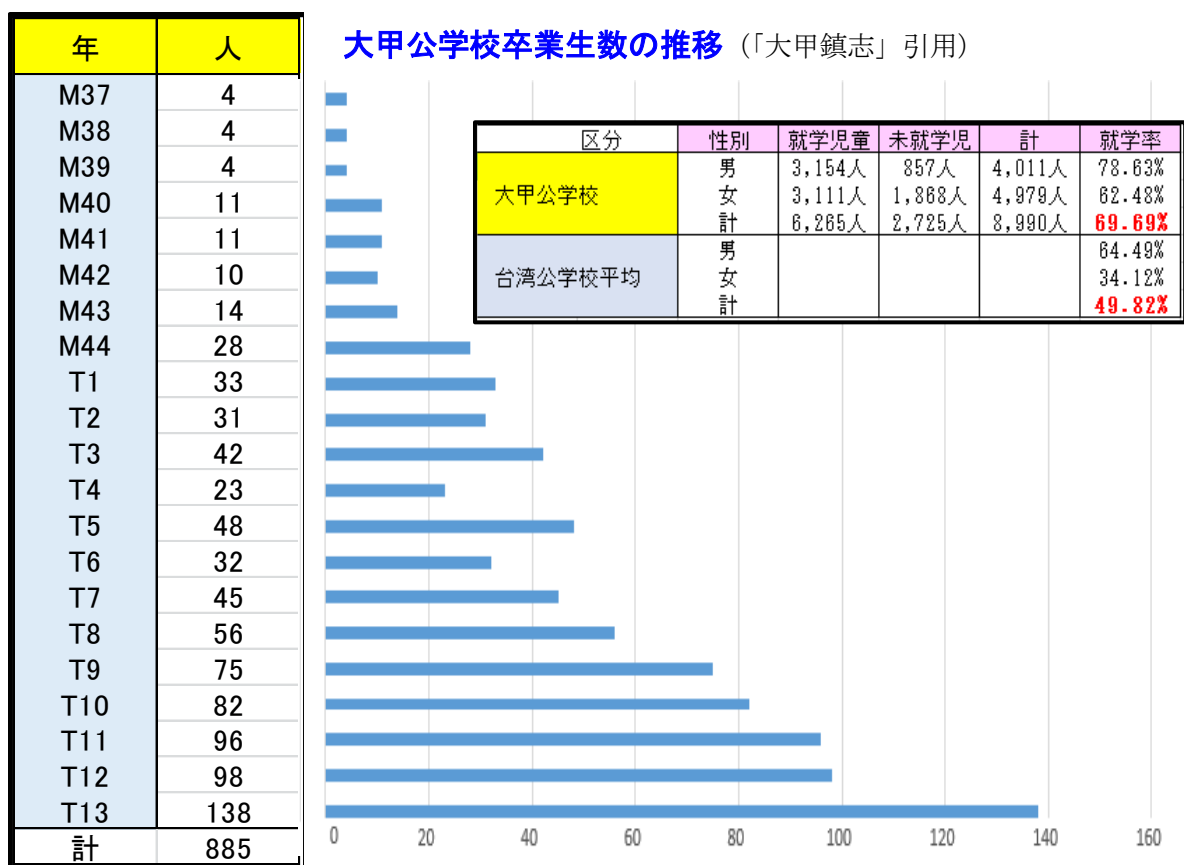
居所は 6 畳と 4.5 畳の二間
（現志賀哲太郎記念室）



当時は拝殿を教室として活用

3 慈父の如く

志賀は体が大きい上に強面（こわもて）で、生徒は初めこそ怖がったが、やがてその心のやさしさがわかり慈父の如く慕った。志賀は貧しい家の子には文具がなければ買って与え、病気になれば菓子や絵本を持って見舞い、学費を払えない生徒には身銭を切ってこれを補助した。しかし、教室では厳格で、怠ける子には叩きもするが、それは愛情のこもったものだった。また、志賀は教育の重要さを訴えた。台湾では住民の生活がまだ不安定で教育への理解が浅かった。彼は日曜日になると、女中のソデに弁当を作らせて遠隔の村まで足を運び、就学適齢期の子の家を訪ねて回って父兄や子供に登校を勧めた。その努力と熱意はやがて実を結び、大甲公学校は台湾でトップの就学率と進学率を誇ることとなり、やがて台湾各界の重要なポストに人材を多く輩出するようになった。



大甲各学校の進学者数（昭和14年統計 「大甲街街勢要覧」引用）

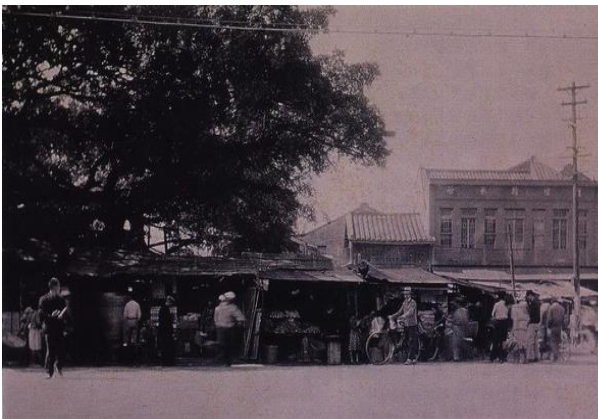
学校別	高等科	上級学校	官吏	医師	実業	その他	卒業生累計
大甲農業国民学校	0	0	16	0	3	19	38
大甲小学校	4	45	25	0	40	11	125
大甲公学校	523	286	89	5	823	1,168	2,894
大甲女子公学校	1	30	0	0	39	569	639
日南公学校	15	36	5	0	309	234	599
頂後?分教場	9	3	0	0	162	19	193
計	552	400	135	5	1,376	2,020	4,488

4 礼節を重んじる

志賀は礼節を重んじた。「志賀仔有礼儀」(礼儀正しい人)と敬われ、人と会えばいつまでも頭を下げるので、皆困ってしまったというエピソードも残る。

また、時間には厳格で生徒の遅刻には罰を加えた。発意して学校に鐘を取り入れ、住民にも時間の観念を与えた。自身も在職中は無遅刻、無欠勤を貫き通している。

志賀は常に修養につとめ、書斎には自分で書いた王陽明の「破山中賊易(さんちゅうのぞくをやぶるはやすく)、破心中賊難(しんちゅうのぞくをやぶるはかたし)」を掲げ、一日三省した。生徒には「自分は三つの宝を持っている。一つは慈悲、二は儉約、三は謙遜である。だからいつも心は平穩無事だ」と言った。事実、彼が怒ったことを見た人はいない、聖人のようだと噂されるようになった一つの理由である。



志賀が人々に挨拶答礼した鎮瀾宮前屋台



王陽明

破 心 破 山
 る 中 る 中
 は の は の
 難 賊 易 賊
 し を く を



志賀は毎朝、大甲駅の時計で時刻を合わせた。



老子

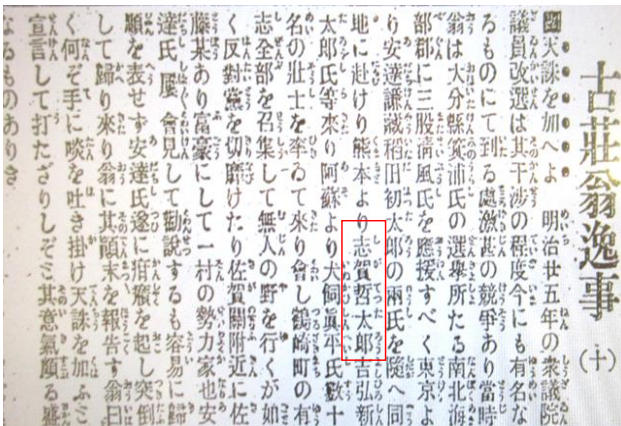
慈
 儉
 謙



5 政界闘士の前歴

志賀の前歴については誰一人知る者がなく、本人も語ることがなかった。ある日、内地から送られて来た新聞に志賀の名前が掲載されており、目にした者は驚いた。衆議院議員や県知事を歴任した古荘嘉門の死去に伴い、その事績を紹介する記事の中で、あの温厚な先生がかつては偉い政界の闘士であったというのだ。教え子たちが代表を選んで真偽を尋ねると「そうだ」とうなづくので、道理で先生は偉いはずだということになり、その噂は街中に広がった。

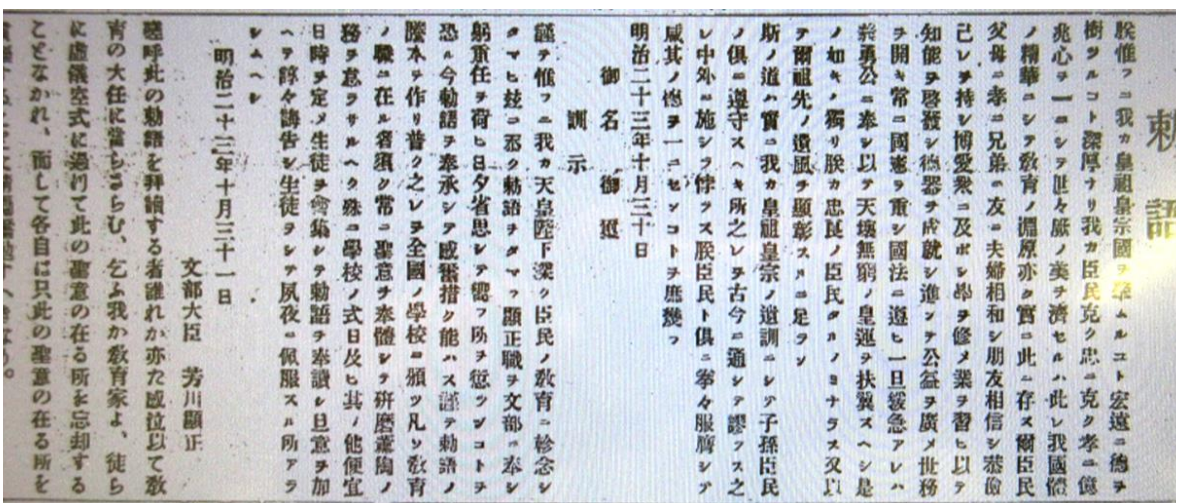
志賀は慶応元（1865）年田原村（益城町）に生まれ、神水義塾で四書五経、陽明学、宗教学（仏教等）を修め、東京の明治法律学校に学び、帰郷後、紫溟会に入会し、熊本国権党に入党して、佐々友房、古荘嘉門、安達謙蔵らと活動。また、九州日日新聞（熊本日日新聞の前身）の記者として各地を遊説し政客と交わった。当時の政争は熾烈で時として刃傷沙汰による流血を伴った。若き日の志賀は、そうした情勢の中で奮戦した闘士だったのである。しかし、やがて政界の醜悪さに嫌気がさし、教育勅語発布がきっかけとなって進むべき道は教育と定め、台湾割譲に伴い、身を台湾子弟の教育に捧げようと決意したのであった。



志賀の記事（大正4年5月30日九州日日新聞）



益城町田原の生家跡（正面奥の家の右側）

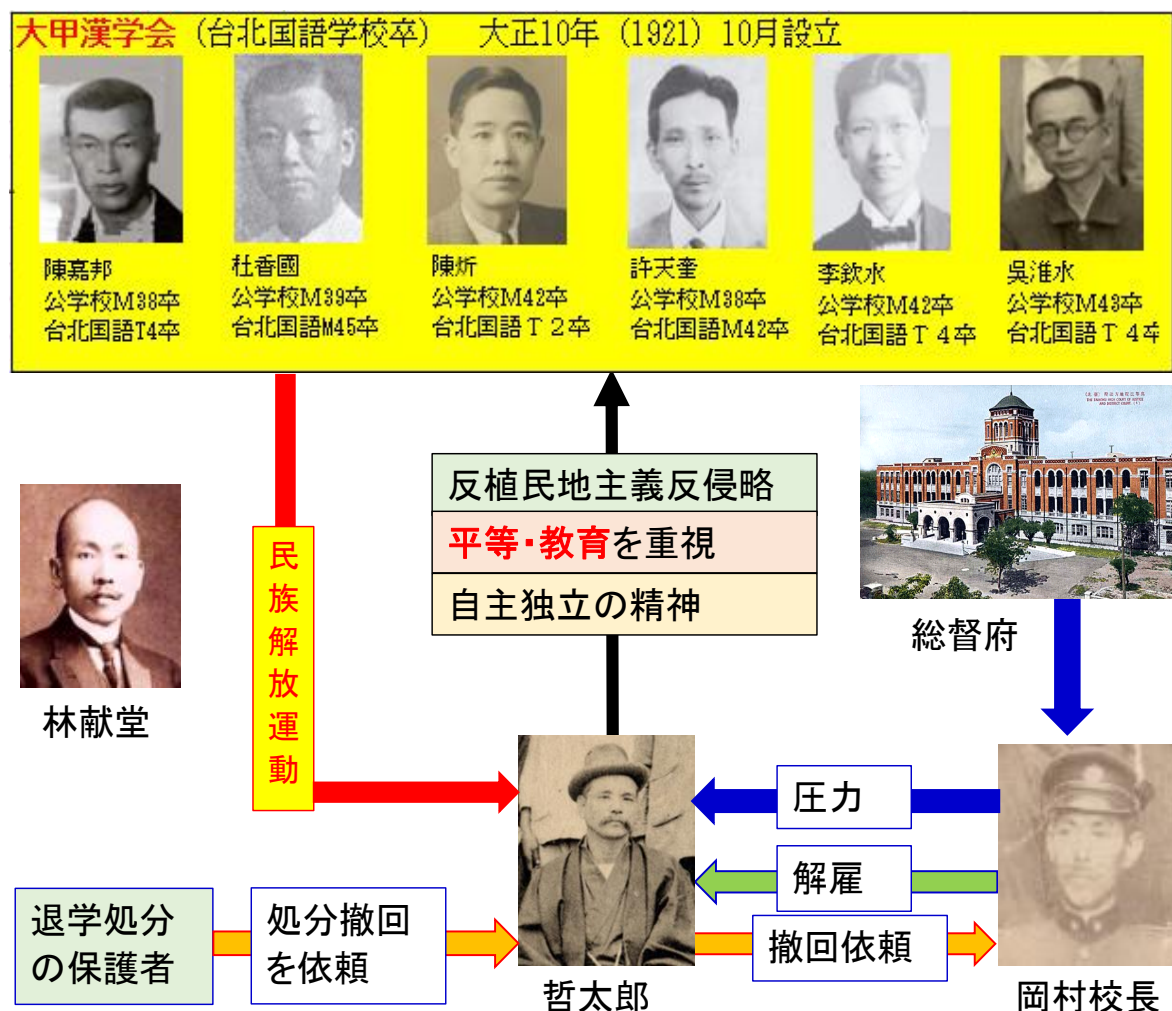


教育の道に進むきっかけとなった教育勅語（明治23年11月6日熊本新聞）

6 民族運動と総督府の狭間で苦悩

台湾解放民族運動の口火を切った林献堂は、郷里の台中市で活動を始めた。台中市が大甲街に近かったため、その運動はいち早く大甲街に流れ込んできた。大甲の青年は「台湾民報」をむさぼり読み、林献堂が提唱する「六三法撤廃運動」に参加。その動きは「台湾議会設置請願運動」「台湾文化協会」と発展拡大していった。

大甲公学校においても生徒の保護者、卒業生そして台湾人教師の大部分が文化協会に入り、民族解放を叫び、文化啓蒙運動に挺身する状況で、官憲に拘束される者も出た。志賀はこの情勢を静観していたが、運動は広がるばかりで、総督府の一官吏として悩み続けた。そんな中、日本人教師と言い争った生徒が退学処分を受け、志賀はこの件で校長に掛け合ったが聞き入れられず、それどころか志賀自身も教職の身分を解かれてしまうことになった。



7 自決

大正 13 (1924) 年 12 月 29 日、志賀はいつものように 4 時に起き、羽織袴の正装で、袖に「出掛けてくる」と云って、遊泳池に向かった。そして遊泳池の堤に立ち、履物をそろえ、およそ 15 キロの大石を身体にくくりつけて池に入り自決した。遺書には「近来神経衰弱症にかかり心神日々に衰へ、更に往日の意気なく、かくして尚職に留まるは上御一人（天皇）に対して相済まず。又父兄に対しても申し訳なし」とあった。これについて 12 月 31 日付けの台湾日報は「今回の行政整理に行く末を悲観して、信望厚き老教育家、池に投身自殺す」の見出しで報じている。大甲公学校運動場で行われた葬儀は盛大を極め、葬列は 1 キロメートルを超えた。道の両脇には住民が供物を並べ、神様を祀る香路祭の形で敬意と弔意を示し、街を挙げて聖人の死を悼んだ。



自決した遊泳池

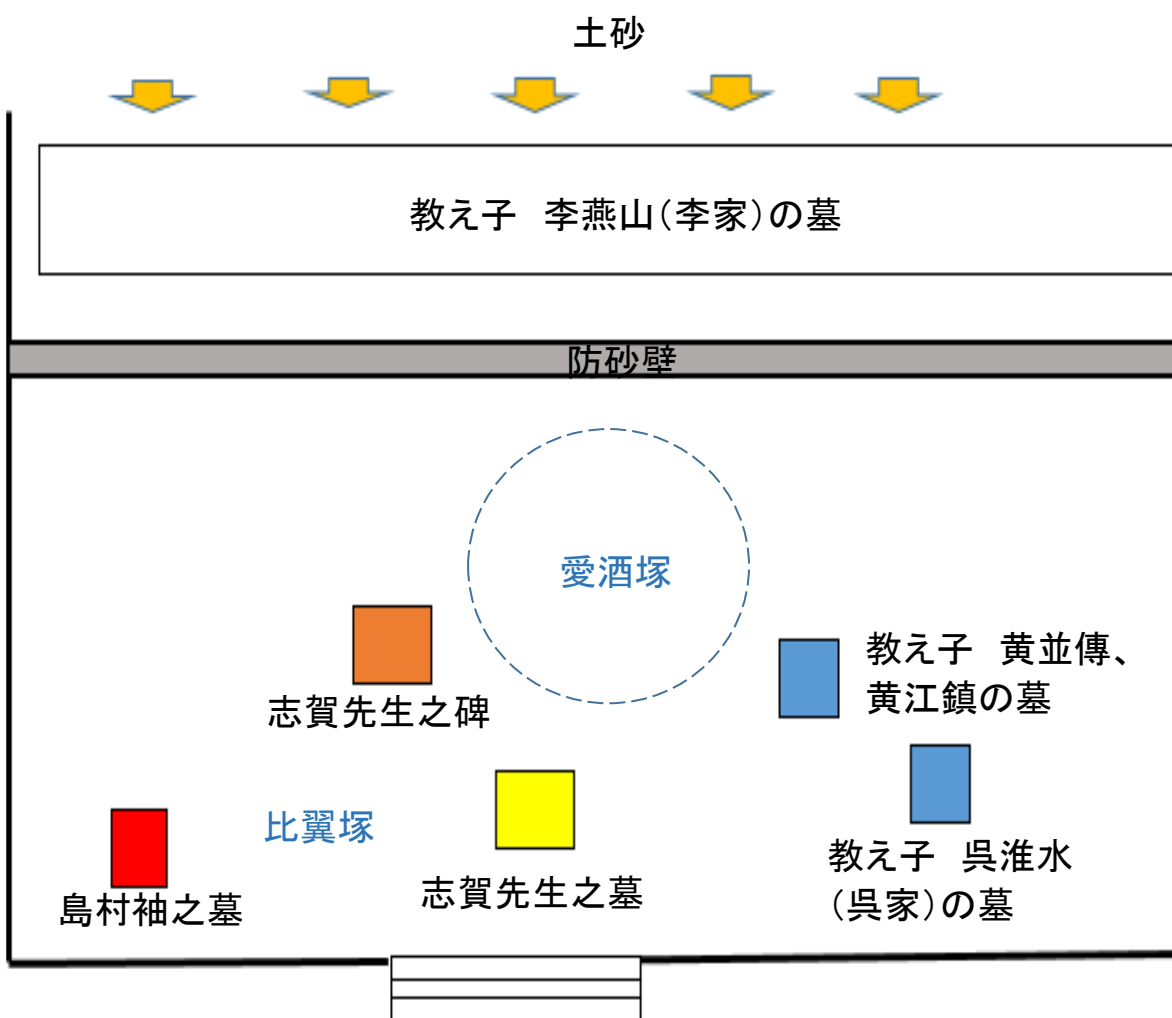
8 教え子の追慕

志賀に対する教え子たちの追慕の念は厚い。

昭和 33 (1958) 年、中華民国政府は日本大使館の依頼により日本人の墓を一ヶ所に集めるよう通達した。それを受けて志賀の墓も撤去されることとなったが、教え子たちはこれを堅く拒み、志賀の墓はそのまま存続されることとなった。

昭和 41 (1966) 年には、戒厳令下において、世界中から集まった百余名の教え子たちが、墓前で「志賀先生生誕百年祭」を行った。日本人を称える行為は反体制行為で逮捕される恐れすらあった頃である。このとき、記念して墓の傍に建てられたのが「志賀先生之碑」である。

その後、土砂崩れで墓域が埋まったとき、教え子・李燕山は上方に自分の墓地を建設して師の墓の防砂壁とした。また、教え子・黄並傳はあの世に行っても飲み交わそうとの約束を守るため、志賀の墓の傍らに自分の墓と愛酒塚を建立した。葬儀のとき、声涙下る弔辞を読み、位牌を持って葬列の先頭に立った呉淮水の墓も隣にあり、教え子たちは死してなお志賀を囲むようにして眠っているのである。



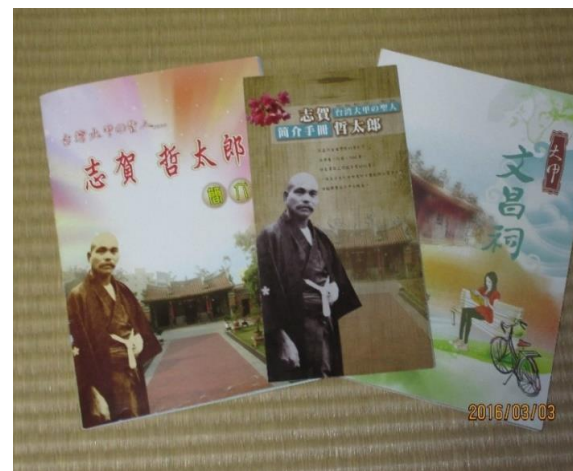
9 志賀紀念室と慰靈祭

平成 23 (2011) 年 12 月 30 日、蔡信豊大甲区長は、「志賀先生がかつて大甲公学校で教師として 26 年間にわたり 1,000 人余りの台湾学生を教え、台湾各界に多大な貢献を残した」として、志賀を文昌帝君を祀る「文昌祠」に入れると発表した。かつて住んでいた「文昌祠」西隣の一室は「志賀哲太郎紀念室」として開放され、志賀の肖像や本などが展示されるようになり、多くの参観者が訪れている。

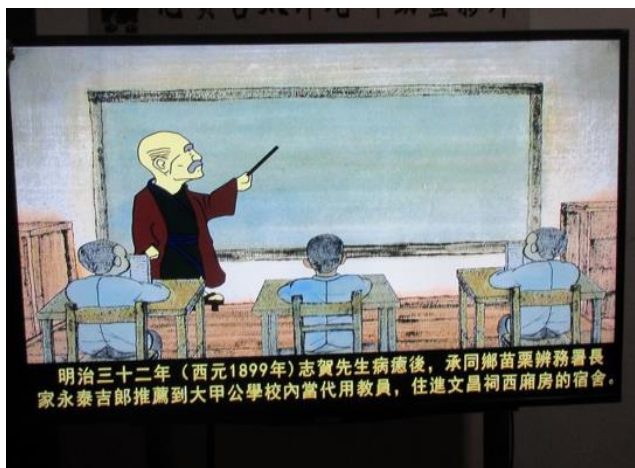
また、毎年 4 月の清明節には大甲区役所主催による志賀の慰靈祭が行われている。



文昌祠内の志賀紀念室の内部



志賀先生を紹介する大甲区の啓発冊子



志賀先生を紹介する啓発アニメ



熊本の訪台団と大甲区公所の合同慰靈祭(H28.02.27)

■ 今に生きる志賀哲太郎先生

本会アドバイザー 澤田寛旨 (熊本国際教育を進める会名誉会長)

私は2度台湾の大甲を訪問したが、大甲では想像以上に志賀先生を敬愛しておられ、心底驚いた。ここに記すのは、志賀先生をめぐる、私と大甲の人々との貴重な交流の記録である。死後90年を経た今日においてもなお、先生は「大甲の聖人」として大甲の人々の中に生きておられるのを感じた。

●日華交流の翼(主催：熊本県国際理解教育研究会)

平成元年12月に実施したこの研修旅行(4泊5日)は、台湾の大甲鎮長林英雄氏に申請して訪問が実現した。旅程は、私が交流していた桃園県西門国民小学と大甲鎮の訪問を組み入れて、学校が冬休みに入った直後に出発することにした。年末の多忙な時期だったが、19名の参加を得て有意義な研修が出来た。



鎮公所での歓迎会：郭秘書の挨拶



前列左から澤田・郭秘書・教え子の李さん



生誕100年記念碑前で

この研修旅行は、熊本県国際理解教育研究会(註参照)の海外研修事業として、次のように計画した。

- ・趣 旨 前年8月には、韓国大田市の宝雲国民学校を訪問し親善・交流したが、本年は大甲鎮訪問・志賀哲太郎先生の墓参りと桃園県西門国民小学を訪問して教職員・児童と交流し国際理解教育の研修を深める。
 - ・旅 程 平成元年12月23日(土)～27日(水)
 - ・参加者 熊本県内の幼小中学校の教職員19名
- 大甲鎮訪問：鎮公所訪問・墓参りについての詳細は、「日華交流の翼記録」と参加者の感想を原文のまま出したが、鎮公所や教え子の李燕山さんの対応・志賀先生の墓参りなど感動した。
(志賀先生については、私の大伯父であることなど事前の情報提供を控えていたので新鮮な感動があったようだ。)

「日華交流の翼記録」より

(第1日：大甲) 台北よりバスで3時間、大甲へ到着。ここは人口約7万の地方都市であるが、今回の親善旅行の大きな目的地の一つである。それは「大甲の聖人」と仰がれる我が熊本の先達者、志賀哲太郎先生の遺徳を偲ぶ地だからである。

15:30 大甲着 歓迎会が催される

市民会館で歓迎会が催された。主催者は志賀先生の教え子たちである。郭傳芳助役(歓迎挨拶の最後に「私の父も先生の教え子でした」と言われた)の挨拶につづき、教え子の李氏(78才)が話された。日本語である。この地における志賀先生の業績と教育者としての薫陶を語られた。そこには、教え子たちが何十年とたった今でも尊敬し報恩しようとする気持ちが脈々と流れている。李氏は私たちを前にして志賀先生を更に思われたのか、感泣されるほどであった。

志賀先生のお墓を訪れる。小高い丘の中腹にあり。遠望がきく、大きなお墓である。いや記念碑といえようか。大甲の方々の志賀先生への心情が思われる。遠くに大甲の街並みが見下ろせ、

今なお大甲を見守っているようである。私たち一同も一献し礼拝する。同郷人として誇らしい気持ちである。

その後、李氏の自宅に招かれる。大きな邸宅であった。

18:30 台中市のホテルへ

記録担当（熊本市立西原中学校 日高）

（参加者の声）より

- 大甲の聖人といわれる本県出身の志賀哲太郎先生（明治32年）ゆかりの地を訪問した。教え子のご老人や助役さん達の話聞き、台湾人の教育に一生を捧げられた先生の高邁な人格や情熱に心をうたれ、教師としての喜び、使命の重さを痛感した。（出水南中 坂本）
- 教育ひとすじに一生を終えられた志賀先生を知り、今でも一途に先生を慕い続けておられた李燕山さんの心からの歓迎。・・・（秋津小 今村）
- 大甲では、教育者として大甲でその生涯を終えられた志賀先生について終始和やかな雰囲気でも熱心に語られた李燕山翁。役所の方々の暖かい歓迎。・・・（健軍小 森）
- 特に、志賀哲太郎先生を敬慕してやまない教え子の一人李燕山さんとの出会いは心に残った。私はこの出会いで初めて志賀哲太郎を知った。情勢が不安定な時代に、異境の地のしかも同一学校で26年も教壇に立ち、最後は自害して果てた「大甲の聖人・志賀哲太郎」という人物に李燕山さんの話を聞き、墓参りをするうちに心を引かれていった。（大江小 松永）
- 大甲鎮での歓迎行事で、我が国との繋がりを改めて感じさせられて。心温まるものがありました。また、台湾においてその教育に一生を捧げられ、大甲の聖人といわれる志賀哲太郎先生が本県出身ということで、更に親しみを感じるとともに、感激でした。（碩台幼稚園 元田）



李燕山さんの自宅に招待されて談笑



日華交流の翼記録集



熊本県国際理解教育研究会設立総会
（前列左から熊本市N教育長・指導主事）

（註）熊本県国際理解教育研究会（昭和62年9月設立）

この研究会は、学校における「国際理解教育」の振興をめざして私が提案し、国際交流団体や熊本県教育委員会、熊本市教育委員会の要請に応じて設立した。研究発表会、公開授業研究会（小・中学校）、熊本県の全小中学校を対象に「国際理解教育」の実態調査を行い、会報「国際理解教育」を作成して全小中学校に贈呈するなど、活発に活動した。

志賀先生の教え子・李燕山さんの返信

澤田様へ

拝復 きびしき折柄お元気でご起居の由お慶び申し上げます

さて先般御一同様ご来駕の節は何事も出来ず誠に恐縮の至り

何卒ご容赦下さいませ

前日御貴信と墓の設計図面ありがたく拝受し非常に理想且つ豪華な設計で将来九州参上の節は

必ずお墓参りします

実は商用の為一ヶ月餘南洋旅行が故にお返事おくれて誠に申訳なく何卒ご寛宥の程願上げます
ご機会ございましたらもう一度ご来駕ご観光あそばされますよう期待しております
では何卒ご自愛の程皆々様に何卒よろしくご傳声下さいませ

3月4日 李燕山 敬具

(原文のまま：大甲を訪問した翌年の平成2年に受信)

※ 残念ながら、李さんを熊本にお迎えして、熊本の志賀先生の墓にお参りいただくことは出来ませんでした。大甲でご自宅にお伺いした時、20名（添乗員を含む）全員に指輪を贈られ、談笑したことを思い出します。（李さんは貿易商として広く活動されていました。）

●訪台先遣訪問団（主催：志賀哲太郎顕彰会）

平成28年2月に実施したこの訪問は、顕彰会が今後の顕彰活動をするために志賀先生の墓参・事跡調査・大甲区公所訪問が必要だということで7名の先遣訪問となった。

出発前には志賀先生の墓所の参拝は困難だという情報があり、大甲区公所の対応も不明で心配したが、公所のあたたかい配慮や予想以上の歓待を頂き、一同感激しながら公所の皆さんと交流を行った。

- ・趣旨 大甲訪問によって志賀先生の事跡調査と現地の方々の志賀先生への敬愛ぶりを確認し、今後の顕彰活動に生かす。
- ・旅程 台中市大甲区公所表敬訪問・墓前祭・文昌祠訪問・大甲公学校など視察
- ・参加者 澤田寛旨、白濱 裕、廣瀬 勝、増田隆策、折田豊生、折田登和子、白濱靖彦



大甲区公所：台中市西北部・人口7.7万



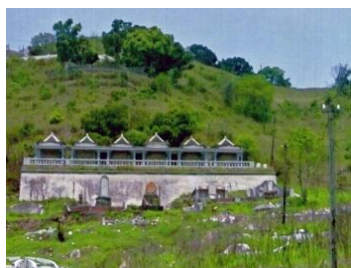
歓迎式典



公所ロビーで記念写真撮影

我々が到着すると、劉來旺区長はじめ10数名の職員の皆さんの出迎えを受け、応接室で歓迎式典が始まった。団長（私）と劉区長の挨拶、参加者紹介、資料贈呈、志賀先生のDVD放映、記念品贈呈などがあり、一連のイベントを通じて、大甲の方々の志賀先生に対する深い敬愛の思いを感じた。

2日目に区公所を退出する時、沢山の職員の方が見送りに出られたが、若い男性職員が「今、日本語を勉強しています」と地名の発音を質問された。私は、「また来ます、しっかり日本語を勉強して下さい」と握手した。また、6～7人の青年職員と固く握手して再会を約束し、公用車に乗った。



鉄砧山と墓地の全景



墓前祭で団長と区長が花束を捧げる



墓碑の前で記念撮影：左後方に記念碑

大甲区公所では、事前にお墓の掃除や墓前祭の準備を下さっており、先生が好きだった日本酒や花束も用意しておられた。公所と合同の墓前祭は心のこもったもので、厳粛に行われた。団長（私）の祭文奉呈、花束・塩井水源の水・日本酒敬供、和歌朗詠の後、全員が線香を手向けて礼拝した。傍らの島村ソデ様の墓でも墓前祭を行った。

墓前祭終了後に、志賀先生の墓所の周りにある教え子の李燕山さんと呉家の墓に詣でた。



文昌祠内の志賀哲太郎記念室



参観者に志賀先生のリーフレットを配り説明



文昌祠で記念撮影

墓前祭終了後に、公用車で文昌祠に行く。この文昌祠は、志賀先生が明治32年に雇教員として大甲公学校で教育を始めた所である。区公所では、志賀先生が住んでおられたその一角を「志賀哲太郎記念室」として保存し、先生の遺徳を説明したリーフレットを作り、参観者に配布し案内している。



車内から見た大甲の街：活気のある街



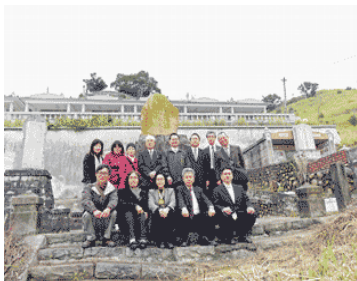
大甲国民小学：左手が校舎



大甲国民中学：立派な施設であった

文昌祠を出て、学校間の交流を考えて大甲国民小学と大甲国民中学を見た。当日は土曜日で訪問交流は出来なかったが、すばらしい施設でこの国が教育を重視していることを知った。

*教え子たちに守られている志賀先生の墓所



堅固な擁壁に守られた先生の墓所



擁壁を作った教え子の李燕山さん（H1）



李燕山さんのお墓に感謝のお参り

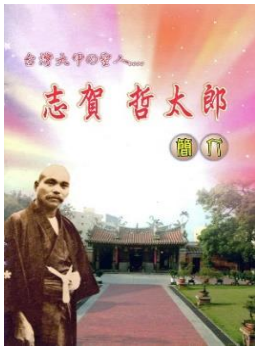
私が平成元年に大甲を訪問した時、教え子の李燕山さんから直接聞いた話である。

「先生のお墓が出来てある年、大雨が降り、先生のお墓が土砂で埋まりました。教え子たちはみんなでお墓を掘り出しました。そして、今後このようなことがないように私（李燕山）は家のお墓を先生の墓所の上で作りました。」

その後、先生の墓所の周りに墓所を作る教え子が増えた。志賀先生が亡くなられて2年後に教え子達

が墓碑を作り、終戦後には日本人の墓が全部取り壊されたのに志賀先生の墓だけは教え子達が日本大使館と交渉して守った。また、生誕 100 周年には孫文の第 2 子で行政院長（首相）の孫科に碑文を書いてもらい「生誕 100 周年記念碑」を建立し、全世界から 100 余名の教え子が集まって志賀先生の生誕 100 周年を祝うなど、教え子達の報恩の念は凄い。

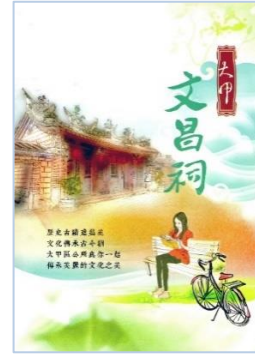
***大甲区公所も志賀先生の遺徳について区民の理解促進を図っている**



劉区长から贈呈された小傳



文昌祠で配布されたリーフレット



文昌祠の中でも志賀先生を紹介

昨年 2 月訪問した時、団員に贈呈された各種の出版物を見て驚いた。先生の死後 90 余年の現在もなお、志賀先生に対する強い敬愛の念を持っておられ、感動した。私が訪問した平成元年にはなかった多数の出版物や記念室の設置など、区民の理解促進を図っておられることに深く感謝したい。

大甲区公所の諸施策によって志賀先生への理解が進み、人々の中に生きておられることをしみじみと感じながら帰国したことであった。

***インターネットで「志賀哲太郎を検索すると」色々な方が投稿されている**



インターネットに出た訪問団の記事



志賀先生を紹介した記事



清明節に先生のお墓に詣でる人々

インターネットには、志賀先生について日本の方や外国の方がたくさん投稿されている。（私も 10 年前から出していたが、現在は最新情報を入れて準備している。）

色々な立場の方が投稿されているので大変参考になる。台湾の方もたくさん出されていて楽しく読んでいる。

台中市大甲区長劉來旺氏よりの手紙（2016.3.22）

拝啓

春暖快適の折、御同様には、ますます御壮健のことと存じます。

この度、訪台旅行は、台中市大甲区と熊本県益城町と友好都市になりますきっかけです。区公所の職員たちは今回の訪台旅行について感謝の気持ちをこめて、心から有難うございました。

志賀哲太郎先生は大甲で二十六年間、「愛」と言う信念を持ち、生徒達を指導し、貧乏な生徒に対し

て援助したり、助け合ったりし、この国を超える博愛の精神のため、志賀哲太郎先生は大甲の人々の心の中で聖人となります。

志賀先生の御偉業は忘れないように、今後、区公所の職員達が毎年必ず志賀先生に祭礼し、志賀先生の御偉業を賞賛することにします。

将来、志賀哲太郎先生の事跡と大甲の古跡、観光地、美食とお土産などを委員会に紹介致し、交流し始めたいと期待しております。

志賀哲太郎顕彰会実行委員会の皆様を心より歓んで、お迎え申し上げます。

では、いつかまた会いましょう、その日をお待ちしております。

敬具

(註) この手紙は、先遣訪問団の帰国後に、私（澤田）宛に届いた。劉区長さんのお人柄が表れた丁寧な文書で、訪問時にいつも笑顔で対応して下さいましたことを思い出します。感謝。



歓迎会で劉区長の挨拶



沢山のお土産を頂きびっくり



「志賀哲太郎簡介」(小伝)を頂く

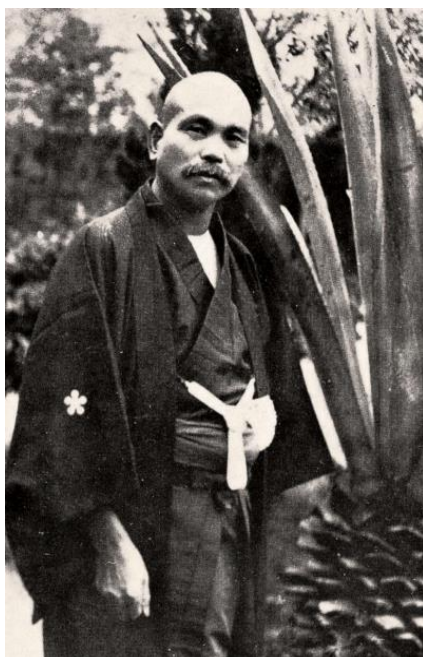
劉来旺大甲区長の文書に「志賀哲太郎先生は大甲で二十六年間「愛」という信念を持ち、(中略)国を超える博愛の精神のため、志賀哲太郎先生は大甲の人々の心の中で聖人となります。」とあるように、志賀先生は、大甲の人々の中に「聖人」として生きておられる。

昨年の熊本地震によって延期された、「講演会・大甲との親善友好の会」が平成30年2月25日(日)に予定されているが、志賀先生との絆を元に大甲と益城町との一日も早い交流が始まるよう願ってやまない。

日本列島最大の地震に見舞われた益城町は復興の途上にあるが、数多くの偉人を輩出した益城町はその叡智によって立派に復興するであろう。そして、その復興した街を大甲の方々に紹介できる日を楽しみにしている。大甲区長劉来旺さんとの再会を期待しつつ。

(資料)

大甲の聖人 志賀哲太郎は、どんな人だったのか？



日本人教師の墓と碑： 台中県大甲鎮は、台中市の西北33キロに位置する静かな地方の街である。(中略) その街の郊外に鐵砧山という高さ236メートルの山がある。(中略) その山の南側山腹に、志賀哲太郎という日本人教師の墓と記念碑が建っている。台湾における日本人のものとしては、戦前から守られる墓石と戦後に立てられた記念碑はともに希な存在である。日本ではほとんど知られていないが、この人物こそ「大甲の聖人」と称えられ、その遺徳は今に伝えられているのである。その墓碑銘には「永久に尊敬を伝えるためにこれを記す」とあるから、その信望はたいへん厚かったようだ。

◇

慈父のごとし： 志賀が台湾に渡ったのは日本の台湾領有の翌年明治29年、彼が30歳の時だった。その3年後、大甲街(現・大甲鎮)の公学校(台湾人子弟のための小学校)に代用教員として着任した。

(中略)

彼は体が大きい上に強面、生徒は初めこそ怖がるが、やがてその心のやさしさに慈父のごとくに慕うといった具合で、例えばかれは貧しい子に対しては、文具がなければ買って与え、病気となれば菓子や絵本を持って見舞い、学費に困れば補助を出した。しかし教室では厳格で、急げ子には叩きもするが、それは愛のこもったものだったという。

また、彼が訴えてやまなかったのは教育の重要さだった。日本領有直後の台湾では、住民の生活がまだ不安定で教育への理解が浅かった。そこで日曜日になると腰に弁当を提げ、例え遠隔の部落であろうと就学適齢期の子の家を訪ねてまわり、父兄や子どもに登校を懸命に勧めた。その努力と誠意は見事に功を奏し、学校は県下一の出席率を示し、進学率も群を抜き、やがて大甲が各界重要な地位に人材を多く輩出する基となった。

彼が礼節を重んじたことは有名で、「志賀仔有礼儀(志賀さんは礼儀正しい)」と敬われ、人と会えばいつもでも頭を下げるので、皆困ってしまったというエピソードも残る。また時間には厳格で、生徒の遅刻には罰を加えた。発意して学校に鐘を取り付け、住民にも時間の観念を与えた。彼自身も、在職中は無遅刻、無欠勤を貫き通している。

そして彼は、常に「慈悲・儉約・でしゃばらないことを三つの宝として教えていた」(墓碑銘)という。

正に硬骨明治人の真面目を見る思いである。

◇

その死の背景： 実は今から数年前、志賀の血縁者や歴史研究家がそれぞれ大甲を訪れ、かつての教え子らと会った際、「先生は命をかけて大甲を守った」という話を聞かされているのである。それはいったい何を意味していたのか。

当時、志賀は法律に蒙(くら)く、官憲による圧迫に悩む住民のため、その代弁者として随分と奔走していた。つまり彼は街のよき相談相手であり、指導者的役割を果たしていた訳だ。

役人側も、彼には内地や総督府高官に知己がいることを知っていたので、その要請は無下にしにくかった。官吏が台湾人側の味方につくことは大問題とされていた当時のこと、役人にとって、彼は目の上のこぶだったに違いない。学校側も彼の振舞いを喜ばず、しきりに転勤を勧めるなど、その排除を計ったが、彼の一視同仁の信念は揺らぐことはなかった。

世は大正に移り、台湾では住民の解放と自治を求める民族運動が活発化し、大甲にも早くからその余波が打ち寄せていた。彼もかつては民権を叫んで政府の弾圧に立ち向かった志士であり、愛する台湾人のために立ち上がりたところだったが、いやしくも総督府の官吏であり、その節義も守り通さなければならず、苦悩を深めていた。「大甲の聖人志賀哲太郎伝」の著者によれば、そのようなジレンマの中で教え子や同僚にも運動への挺身者が出るに及び、ついに真の日本人ここにありと、自決の拳に出たようだ、という。

「台湾と日本 交流秘話」(展転社・平成8年)から抜粋引用：「大甲の聖人・志賀哲太郎」(P.125~130)

※ 伝記としては、ほかに「志賀哲太郎傳」(昭和49年)、「志賀哲太郎小傳」(平成29年)があります。

志賀哲太郎の葬儀ほど、その人となりを雄弁に語るものはほかにない！

■志賀哲太郎の葬儀（「志賀哲太郎小傳」から抜粋）

◇

葬儀は正月を控えてのことなので、翌30日に執行することとし、教え子たちの手により、急遽準備された。式場は公学校の校庭の西側に大きな黒白の天幕が張り巡らされ、中央の一段高い祭壇に柁（ひつぎ）を花で飾り、机の上には様々な供物や祭具が並べられ、右側に遺族席が準備された。遺族がいないのに遺族席を準備するのはどうかと思った人もいたが、教え子の長老たちが先を争ってその席に着いた。大人がだんだん増えてきて、子どもたちは端の方に押しやられ、前の人々の首の間から祭壇を眺めねばならぬ程大勢の住民が参列した。

導師は台中の日本人和尚大野鳳洲（ほうしゅう）師が努め、5人の従者とともに祭壇に上った。太い読経の音が四方を圧して聞こえると、辺りは水を打ったように静まり返り、荘厳な空気が会場を包んだ。読経（どきょう）の声につれて、遺族席に座っていた教え子たちがハンカチを出して涙を拭（ぬ）きだし、それが次々と拡がり、すすり泣きの声があちこちから聞こえた。弔辞（びやくじ）を読む人が嗚咽（おえつ）で声をつまらせ涙を拭くと皆も泣いた。多くの弔辞、弔詞（びやくご）が寄せられたが、いずれも切々たるもので、哲太郎の遺徳を偲（おも）ひ、その死を惜しむ情にあふれるものばかりであった。式場外では、台湾式に千余の爆竹が鳴らされ、大甲の街は喪（も）に包まれた。

◇

葬列は公学校の校庭を出て、媽祖廟の前を経由して、北へ向かって進んだ。葬送の沿路の商店や民家は、皆門前の路傍に机を出し供物を並べ、線香を立て、金銀紙を焼き、爆竹を鳴らして礼拝し、涙を流して大甲の聖人を見送った。道行く人も立ち止まって黙禱し、むせび泣いた。

台湾では路傍に机を出して、供物を並べ、線香を立てて礼拝することを香路祭あるいは置香祭と称し、神さまの御輿（ごよ）行列に限られた敬意の表示である。今回の哲太郎個人に対する香路祭は大甲始まって以来の空前絶後のことであった。

葬送の列は延々1キロメートルに達した。当時の大甲の人口は3千人であり、街を挙げて「大甲の聖人」を弔ったということになる。

■教え子・吳淮水（台湾文化協会）の弔辞

弔 辞

大正十三年十二月三十日、故志賀先生の御靈前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。

先生は、明治三十二年二月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘二十有六年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる。その結果、我が大甲は血氣旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気を奮い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす。嗚呼哀しいかな。聞けば往時、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出慮し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、二十六年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す。大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高樓に入り、我れ情誼の校舎に起居す。彼、巨万の富を有するに對し、我数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、いずれが貴きか未だ量る能はず。不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり。然るに名慾利情に勝つ先生は、終に、健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし。志賀死すとも徳は死せず、不肖を薰化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はむことを。

門下生 吳淮水 敬拜

※ 教え子・吳淮水（ご わいすい）の弔辞は、吳の心情を推し量りながらゆっくりとお読み頂きたい。恩師に対する深甚なる思慕の情と悲しみがこもった名文である。吳は、志賀の思想信条とその苦難に満ちた立場を最も深く理解していた教え子の一人だった。

※ 資料は、本会の啓発用リーフレットから抜粋し引用した。

※ 本会では、県内各地で10～50人規模のミニ講演会・研修会を行っている。本会の講話や講演を希望される場合は、裏表紙に記載してある事務局までご相談頂きたい。

(資料)

志賀哲太郎年表

和 暦	西暦	月日	年齢	事 項
慶応元年	1865	8月28日	0	父志賀甚三郎、母寿加の長男として田原村 330 番地で誕生 幼名岩太郎
明治 4 年	1871		5	中村傳兵衛に四書五経の手習いを受ける
明治 5 年	1872		6	木山町の私塾に通う
明治 16 年	1883		17	中西牛郎塾長の「神水義塾」にて普通学を修業(飽託郡神水村)
明治 18 年	1885		19	新仏教運動の宣伝活動、中西牛郎・八淵蟠龍の諸賢人と行動
明治 20 年	1887	2月	21	明治法律学校入学、法律学を専攻(※ 大甲村庄史による。)
明治 22 年	1889	12月	24	12月父甚三郎死去(享年 57 歳) (後に明治法律学校を自主退学)
明治 23 年	1890	3月	24	紫溟会入会 国権党入党 九州日日新聞の記者となる 古荘嘉門・佐々友房・安達謙蔵・宮崎滔天らと交流
明治 24 年	1891	2~12月	26	英語学修業(京都オリエンタルホール)
明治 25 年	1892		26	法律学研究のため元控訴院判事深野達に師事
明治 26 年	1893	5~6月	27	選挙活動で東京、京都へ(宗方小太郎日記による)
明治 27 年	1894	3月	28	九州日々新聞を辞し国権党を離党
全	全	5月	28	原水尋常小学校(熊本県菊池郡)雇教員
明治 28 年	1895	3月	29	大原義塾(菊池郡原水)塾頭に就任
明治 29 年	1896	12月	30	台湾の子弟教育を目指し台湾へ渡る
明治 30 年	1897		31	台湾語習得を兼ねて台北で酒店を開業するも資金繰り悪化で年末に閉店
明治 31 年	1898		32	台湾縦貫鉄道関連従事・伯公坑で土匪の襲撃を受け女中ソデの機転で助かる 夏マリアで鎮瀾宮(媽祖廟)の陸軍衛戍病院大甲分院に入院
全	全	7月28日	32	小学校官制公布、公学校令発布(四年制7~12歳)
全	全	10月1日	33	大甲公学校創立(生徒 40 余人)
明治 32 年	1899	2月23日	33	雇教員として採用 居所を文昌祠に移す 台湾語研修を受ける
全	全	5月19日	33	大甲公学校へ赴任
明治 35 年	1902		37	街民の相談に応じ筏税を撤回させる 教諭登用を断る
全	全	9月18日	37	新教室落成(建設委員長呉朝宗=呉准水の実父)
明治 37 年	1904	3月	38	第 1 回卒業生を出す
全	全	7月	38	母寿加死去(62 歳)
明治 40 年	1907	4月	41	大甲公学校の学制が四年制から六年制へ
明治 42 年	1909		43	三堡に校舎完成
大正 2 年	1913	4月	47	400 余名の男子生徒が弁髪を廃止
大正 3 年	1914	3月31日	48	金子校長辞職
全	全	6月17日	48	勤続 15 年以上徽章授与
大正 4 年	1915	1月	49	新建礼堂(講堂)落成 (※ 後年、勤続 25 周年祝賀会はここで行われた。)
大正 8 年	1919	8月10日	53	勤続 20 周年祝賀会は岡村校長の圧力で中止
大正 11 年	1922	3月31日	56	台湾公立学校官制公布(教諭の名称が訓導に改称)
全	全	4月1日	56	教員心得となる
大正 12 年	1923	12月	58	抗日運動の教え子杜香國ら逮捕
大正 13 年	1924	7月7日	58	遊水池完成
全	全	12月21日	59	勤続 25 周年祝賀会
全	全	12月29日	59	遊水池で自決
全	全	12月30日		葬儀挙行、鉄砧山に埋葬
大正 14 年	1925	1月23日		上益城郡津森村役場で除籍
全	全	2月23日		島村ソデ(袖)、杜香國に哲太郎の死亡に至るまでの経緯について書簡を送る
昭和元年	1926	10月30日		鉄砧山に「志賀先生之墓」建立 (没後 2 年)
昭和 5 年	1930			芝山巖神社に名前が刻印される (没後 5 年)
昭和 7 年	1932	1月21日		哲太郎贈書の大甲街図書館設立 (没後 7 年)
昭和 10 年	1935	8月		澤田ミノが田原に墓碑建立 (没後 11 年)
昭和 33 年	1958			教え子、日本大使館の哲太郎の墓撤去に反対 (没後 34 年)
昭和 41 年	1966	9月28日		生誕百周年記念墓前祭「志賀先生之碑」建立 (没後 42 年)
昭和 49 年	1974	11月15日		黄江鎮「恩師志賀哲太郎」・桑野豊助「志賀哲太郎傳」出版 (没後 50 年)
平成 16 年	2004	12月		大甲村庄史 大甲の聖人志賀哲太郎傳発刊 (没後 80 年)
平成 24 年	2012	2月2日		文昌祠に志賀記念室開設 (没後 87 年)
平成 27 年	2015	9月6日		志賀哲太郎先生生誕 150 年記念顕彰会実行委員会設置 (没後 91 年)
平成 28 年	2016	2月27日		志賀哲太郎顕彰会訪台団墓参 (没後 91 年)

※ 年齢は満年齢。没後年数については四捨五入した整数年数を記載(例: 1 年 7 か月=1.58 年=2 年)。

◆ たくさんのご協賛の広告、ありがとうございます。 ◆

益城町 鎮座
木山神宮

[益城町再興]

〒861-2242 益城町木山 281
TEL. 096-286-5185

私達も応援しています

(有)松本農園
上益城郡退職校長会
西山設備工業(有)
かがクリニック
竹本紀彦 光永幸弘
有馬伸明 甲斐喜三男
坂東厚子(東京都)

益城町商工会会員

看板の軸丸

代表者 軸丸 雅子

Tel/Fax (096)286-9585
Mobile 090-2513-0189

〒861-2244 益城町寺迫 924-4

コインランドリー 青い空

馬水店(コスモス横) 寺迫店(県道津森線沿い)

御船地域開発有限会社
熊本市中央区水前寺6丁目46番32号
TEL.096-385-2111 FAX.096-385-2149

土木・舗装・とび・土木工事一式

日本サン技研 有限会社

益城町の復興に全力で取り組みます!

益城町寺中 6-13 TEL. 287-0087
FAX. 287-0086



医療法人社団 福田会

ふくだ整形外科 <診療科目> 整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科

院長 福田 朋博 (日本整形外科学会 整形外科専門医)

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	○	○	○	○
午後 2:00~6:30	○	○	○	/	○	4時まで

電話(096)286-7391
上益城郡益城町馬水805
産交バス 上野添バス停前

★運動器リハビリ ★脳血管疾患等リハビリ ★超音波エコー診断 ★骨粗鬆症検診(腰椎での骨密度測定) ★筋力強化訓練・有酸素運動の指導



社会福祉法人こころ

保育園 こころ

たくましく

かしく

自分らしく

思いやりの“こころ”を大切に育てます



〒861-2244
上益城郡益城町寺迫1021-1

TEL:096-273-9600
FAX:096-273-9601

あいさつ・返事・思いやり！

武道（スポーツ）教育の

春 和 会

代表 合志みゆき

全日本空手道連盟公認五段 錬士

全日本空手道連盟組手全国審判員

TEL.090-9472-1446（合志）

E-mail kbicsclub-sky@ktd.biglobe.ne.jp

見学
体験
随時可

車検・点検・钣金塗装・新車・中古車
各種ローンOK・スズキ代理店

河端自動車整備工場



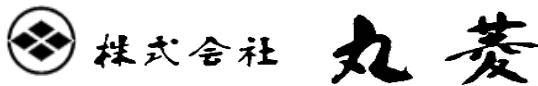
☎ 286-2315

☎ 284-6030

(夜)286-6323

Safe Driving ∞ Happy Carlife

製菓製パン、外食産業全般の原材料、器具・機械設備、パッケージ、
商品企画、店舗設計までトータルでご相談を承ります。



代表取締役社長 本田 雅裕

本社：〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園788

TEL:096-286-1500(代表) / FAX:096-286-8816

福岡支店：〒810-0071 福岡市中央区那の津3-1-16

TEL:092-717-7310(代表) / FAX:092-717-7317

支社：関東支社

営業所：宮崎・鹿児島・長崎・大分・北九州・佐賀・山口・久留米

直営店：WHOLE SQUARE福岡、WHOLE SQUARE熊本

益城ファーマーズビレッジ・ファム

URL: <http://www.marubishi-group.co.jp/>

通販：楽天(スイートキッチン) <http://www.rakuten.ne.jp/gold/kashizairyo/>



idea+design+eat
**ideat
marubishi**

Ingredient & Machines

Product & Development
Wholesale & Distribution Systems
Shop Planning & Machinery Service
Training & Convention



WHOLE SQUARE
MARUBISHI QUALITY FOOD STORE

SWEET
KITCHEN

熊本の豊潤な大地で育んだ「スローフード」

MARS Co.,Ltd.





カット野菜・真空低温調理
農業法人 株式会社ベジタ

代表取締役 外口 栄一

本社 〒860-0055 熊本市西区蓮台寺 1-2-31
 工場 〒860-0058 熊本市西区田崎町 484 A-1 熊本地方卸売市場内
 TEL. 096-355-0660 FAX. 096-359-5240
 E-mail youkosou@festa.ocn.ne.jp

農園養己荘 土づくりは人づくり

〒869-1603 阿蘇郡高森町色見 121-4

つるのこ芋を地域ブランドに!

奥阿蘇高森つるのこ芋普及委員会 委員 外口 栄一

ちぢみ
おす
ぎょうぎの屋

自家農園から届く野菜とこだわりの食材

〒860-0807
 熊本市中央区下通り 1-7-1
 TEL. 096-356-6640

For Links
 Co., Ltd.

フォーリンクス 〒861-2231
 代表 藏田 誠二 益城町安永 558-4

- 新車・中古車販売 (国産・輸入車)
- オークション代行 - 注文販売
- 車両買取り
- 車検・整備・钣金・塗装
- オーディオ販売・取付け
- カー用品販売・取付け
- 各種保険取扱い

Mobile. 090-2710-0312
 Tel. 096-287-4040
 Fax. 096-287-2020

www.for-links2016.com



千草保育園
 ちくさほいくえん

社会福祉法人 向真会
 理事長 城本敬一郎

● 保育目標

- ・元気な子ども
- ・自主的で意欲的な子ども
- ・自分の力を発揮し友達を大切に子ども

〒860-0833 熊本市中央区平成 3-2-12
 (電話) 096-378-3958

お気軽にお問い合わせください。

お家のことは何でもご相談ください(査定無料)



ニコニコ

創業 30 年
株式会社 ニコニコ不動産

代表取締役 山田 真理子

〒861-2106 熊本市東区東野 2-1-10

E-mail/ info@nikoniko-f.com

TEL 096-369-8566 FAX 096-385-2157



熊本東店

熊本県知事(3)第 4423 号
 賃貸住宅管理業 国土交通大臣(1)第 1618 号



あぎゃん話こぎゃん話 語ります! 寿咲亜以 (すさき あい)

肥後の歴史物語と民話の会「語り座」(2009年設立)代表、語り手。熊本弁による民話語や文学作品の朗読など、幅広い内容で活動。県内各地の民話と歴史話を通じて自ら郷土に対する愛と誇りを育み、先人に学び、その成果を脚本にして多くの人々に語り伝えている。民話と歴史物語に生演奏を織り交せた公演を試み、好評を博している。いろいろな形態で出張公演も行う。語り口座「民話塾」も開催。

お問い合わせメール: suzakiai@hotmail.com

復興基金〔被災住宅復旧支援〕の工事をします（地盤改良工事も行います）

ご相談から補助金交付請求書の受付完了までの全てを行います！



■当社の業務内容

- 1 トータルステーションによる測量
- 2 CAD 図面作成
- 3 建築確認が必要な場合(2m以上の擁壁)の申請
- 4 公共土木工事基準に準じた確実な施工・管理
- 5 全ての必要書類の作成

■主要技術者資格

- 1級土木施工管理技士
(管理経験 20 年)
(監理技術者資格保有)
- 薬液注入管理技士
(地盤改良～経験 30 年)
- 解体工事施工技師
- 2級建設機械施工技師
- 宅地建物取引主任者
- 排水設備工事責任技術者
- その他

◆土木工事 ◆総合解体工事

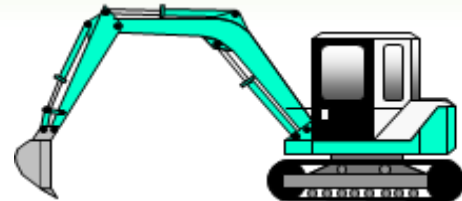
- ◇ 高い技術力と豊富な経験
- ◇ より良い仕事を安心価格で

● 見積無料 お気軽にお電話ください！

〒861-2231 益城町安永 678

合同会社 **コウエイ開発**

TEL. 096-202-7063



メディカルスクエア
九品寺クリニック
Medical Square KUHONJI CLINIC

院長 **横山利美**

〒862-0976 熊本市中央区九品寺 5-15-13

TEL: 096-364-1777 | FAX: 096-364-1780

■診療科目

内科・消化器内科・放射線科・循環器内科

私達も応援しています。

宮本紀六 西田一郎 柿田 博
吉田宏平 竹田邦彦 城本純二
瀬上俊介 金木弓子 片岡涼一
西 たよ子 青木国広 坂田敏昭
川上一郎 篠原晴美 尾方洋直
中神 実 山田靖次

内野玲歯科
UCHINO REI DENTAL CLINIC

院長 **内野 玲**

〒861-2241

益城町大字宮園 535 番地 7

TEL: 096-243-8241

【開院時刻】月～土曜日 9:00

(日祝休診)

患者様におしく

食べていただきたい！

温かいご支援
ありがとうございます！



整形外科・リハビリテーション科

益城整形外科

〒861-2231

益城町安永 805-4

TEL 286-1818

元気 悠々！

健康な毎日を

サポートします。





有限会社熊宮自動車 代表者 熊宮敏宏

自動車の钣金塗装・整備・販売 JA 共済連指定工場

〒861-2231 上益城郡益城町守永 671

TEL.096-286-2301 FAX.096-286-2749

kumamiya@nifty.com

志賀哲太郎顕彰会について

【設立の趣旨】

本会は、「大甲の聖人」として台湾の人々に深く敬愛されている益城町津森出身の教育者「志賀哲太郎」の功績を明らかにし、益城町をはじめ広く熊本県内外に周知するとともに、その顕彰に係る諸事業を通じて、台湾台中市（大甲区）と益城町との交流を深め、益城町及び熊本県の教育・文化・観光事業及び諸産業の発展に資することを目的としています。

【構成員】

- 会長** 宮本睦士（益城の歴史遺産を守る会会長・上陳）
- 会員** [町内] 植山洋一（木山） 城本誠也（赤井） 城本真澄（赤井） 村口省三（安永）
松野陽子（木山） 堀田 清（馬水） 齊藤輝代（古閑） 市川雅浩（古閑）
守田 喬（宮園） 森本正敏（安永） 松野伸子（寺迫） 折田豊生（馬水）
[町外] 澤田寛旨（八代市） 澤田 光（八代市） 樋口利雄（熊本市）
白濱 裕（熊本市） 廣瀬 勝（小国町） 増田隆策（熊本市） 内田圭二（熊本市）
外口栄一（熊本市） 外口キヨ子（熊本市） 彌富照皇（熊本市）
藤門豊明（八代市） 永田 誠（熊本市） 野元政司（熊本市）
- 賛助会員** [町内] 片岡涼一（辻の城） 西 たよ子（辻の城） 青木国広（木山）
[町外] 原 秀志（大阪府茨木市） 宮本光雄（熊本市） 澤田荔子（八代市）
叶 貞夫（熊本市） 有橋口石彫工業（熊本市） 笠井義雄（熊本市）
松田弘幸（熊本市） 馬場園弓子（熊本市） 天野和也（熊本市）
- 協力会員** [町内] 秋月恵一（島田） 折田登和子（馬水） 亀山一茂・成予（馬水）
折田安正・麻美（辻の城）
[町外] 白浜靖彦（北海道・江別市） 白濱まゆり（熊本市）
山崎正人・宇代（福岡市）
- 顧問** 木原 稔（財務副大臣・衆議院議員）
稲田忠則（益城町議会議長）
坂田敏昭（益城町教育委員）
永田壮一（熊本大分ロータリー統括管理者・東熊本病院理事長）

【主な事業】

- **教育啓発** 講演会・研修会開催。パンフレット・リーフレット等の配布。HP開設。etc.
- **図書出版** 「志賀哲太郎小傳」（H29）・「志賀哲太郎資料集」（H30）・会誌刊行。
- **提案提起** 関係機関への提言（国際教育・国際交流・観光・交易の推進等）
- **連携調整** 日台友好親善に関する関係市町村・団体との連携組織の設立・情報交換・交流

※ 益城町企画財政課、益城町教育委員会、熊本県地域振興課・国際課・交通政策課、熊本県教育委員会の御指導を仰ぎながら運営しています。

■ 会員募集

会員を募集しています。

歴史の好きな方、大歓迎です。ただし、本会は、個人的な研究発表や学習の場ではありません。また、政治的・思想的・宗教的活動もできません。

本会の活動は、志賀哲太郎に関係する教育・文化・産業振興及び地域・国際交流を目的としたボランティア活動です。多くの皆様の善意のご協力をお願いいたします。

◇正会員

- ・会の運営に参加し、発行物の提供を受けることができます。
- ・月例開催の会議に参加していただきます。(できる範囲で結構です。)
- ・年会費は、3,000 円です。

◇賛助会員

- ・会の活動を側面から任意にサポートしていただきます。
- ・会の活動状況の報告、発行物の提供を受けることができます。
- ・年会費は、2,000 円です。

◇協力会員

- ・広報など、近隣の会員の活動を臨時にサポートしていただきます。
- ・臨時に発行物の提供を受けることができます。
- ・年会費は、不要です。ただし、任意のご寄付は大歓迎です。

【志賀哲太郎顕彰会の歩み】

- H27.09.06 発足(会長:松野國策=熊本県文化功労者・熊本歴史学研究会会長)
月例会議において諸課題を検討。
- H28.02.26-29 代表者7名が台湾台中市大甲区を訪問
(大甲区長表敬訪問・志賀哲太郎墓前祭催行・資料調査等)
- H28.04.14 熊本大震災により活動中断
(5/28に開催を予定していた志賀哲太郎顕彰講演会は平成30年に延期)
- H28.08.07 臨時会議
- H28.11.16 月例会議再開
- H28.12.29 松野國策会長逝去(※志賀哲太郎の命日と同日)
- H29.01.14 新会長選任(会長:宮本睦士=益城の歴史遺産を守る会会長・元小中学校校長)
- H29.02- 県内各地で志賀哲太郎パネル展を巡回開催
- H29.03.05 益城町保健福祉センターで「志賀哲太郎研修会」開催(約100名参加)
- H29.03- 県内各地でミニ講演会・研修会を実施
- H29.11.16-19 代表者14名が台湾台中市大甲区を訪問予定(墓参・交流・調査・研修等)
- H29.12.10 益城町において日台交流会(100人)を開催予定
- H30.02.25 益城文化会館において講演会(400人)を開催予定

■ 志賀哲太郎顕彰会

事務局 〒861-2242 益城町木山556番地20 植山方
(電話) 096-286-8268

【お問合せ先】

事務局長 植山 洋一 〒861-2242 益城町木山556番地20
(電話) 090-1087-6213 E-mail: ueyama-1@seagreen.ocn.ne.jp

事務局員 折田 豊生 〒861-2232 益城町馬水848番地10
(電話) 090-8399-4854 E-mail: olita@lep.bbq.jp